序 文

藩政時代の新田開発により現在の礎が築かれた青森県つがる市には、今も見渡す限りの田園風景が広がり、その西方には、あたかも屏風を広げたように見えることから命名された屏風山砂丘地を望むことができます。この屏風山砂丘地は、近世以降に防風・防砂のための植林事業が進められ、新田開発の歴史を今に伝えています。

一方で屏風山砂丘地は、縄文時代の暮らしの跡が色濃く残る土地でもあり、この地の縄文文化は、藩政時代の歴史とともに市民の心の拠り所となっています。特に、亀ヶ岡遺跡は縄文時代晩期を代表する遺跡であり、大型遮光器土偶の出土地として市民に親しまれ、全国的にも知られているところです。

亀ヶ岡遺跡の高い認知度や学術的評価は一朝一夕に成し遂げられたものではなく、多くの先学に注目され、研究されてきた永い歴史を有しています。先人の努力とともに、亀ヶ岡遺跡とその出土品が日本の歴史に重要な位置を占めることに思いを致し、市民と行政が手を携えて遺跡の保全と活用に取り組んでいくことは、貴重な歴史資源の魅力や情報発信力を高め、ひいては地域の活力向上につながっていくものと期待されます。

つがる市教育委員会は、亀ヶ岡遺跡の内容確認を目的として平成20年度から発掘調査を継続的に実施してきましたが、この度その成果を一書にまとめるとともに、亀ヶ岡遺跡で積み重ねられてきた過去の調査研究成果を現在の視点から再度評価し直すことを目的として、本総括報告書を刊行する運びとなりました。

本書の刊行が亀ヶ岡遺跡の価値を再確認する一助となり、今後の遺跡保全と整備活用のための基礎資料として活かされていくことを願っております。

最後になりましたが、これまで亀ヶ岡遺跡の調査や保全にご支援をいただきました地元の皆様、調査の実施から総括報告書の刊行までご指導をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

令和元（2019）年６月

つがる市教育委員会
教育長　葛西　嶷輔

例 言

１．本書は、2008～2017（平成 20～29）年度につがる市教育委員会が国庫補助及び県費補助を受けて実施した市内遺跡発掘調査事業に伴う亀ヶ岡遺跡の発掘調査成果と、過去の諸調査機関および個人の発掘調査や研究成果、各種文献の情報等を総合した総括報告書である。

２．つがる市教育委員会が担当した発掘調査の実施体制・担当職員の詳細は第１章第２節に記した。

３．本書は、つがる市教育委員会社会教育文化課が編集し、羽石智治・堀内和宏・木戸奈央子・小林和樹および佐野忠史（現 小田原市教育委員会）が執筆した。執筆は、第１章第１・６節を佐野・羽石、第１章第２・３節を羽石、第１章第５節を佐野・小林、第２章を佐野・羽石・堀内・木戸・小林、第３章第１・３節を堀内、第３章第２節を羽石、第４章第２節を小林・木戸・堀内・羽石、第４章第３節を小林・木戸・羽石、第４章第１・４・５節、第６章、付編第１節を羽石が担当した。

４．本書に掲載の調査写真は佐野と羽石が撮影し、遺物写真は羽石が撮影した。図版作成は佐野・羽石・木戸が中心となり、つがる市教育委員会社会教育文化課職員及び作業員が担当した。なお、遺物実測図の一部は、株式会社パスコに委託して作成した。

５．慶應義塾大学・青森県教育委員会・青森県立郷土館が実施した調査については、調査図面や遺物実測図を既刊報告書から転載した。また、転載にあたり縮尺を変更したものもあり、線の太さ等に不統一な点がある。

６．第１章第４節は小岩直人氏（弘前大学教育学部）、第５章第３節は吉田邦夫氏（東京大学総合研究博物館）・宮腰哲雄氏・本多貴之氏（明治大学理工学部）・河西　学氏（公益財団法人山梨文化財研究所）、第５章第５節は植月　学氏（弘前大学人文社会科学部、現 帝京大学文化財研究所）より玉稿を賜った。

７．第２章第 10 節は品川欣也氏（東京国立博物館）より玉稿を賜った。また、第２章第 10 節と報告書表紙に掲載した亀ヶ岡遺跡出土遮光器土偶（重要文化財）の三次元計測データによる展開図および X 線 CT データによる断面画像、巻頭写真６上の掲載写真も品川氏より御提供いただいた。

８．第５章第４節は、明治大学古文化財研究所（2011）『蛍光Ｘ線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定―基礎データ集〈2〉―』および同施設からつがる市教育委員会へ提供された報告書「青森県つがる市内出土黒曜石製遺物の原産地推定」（明治大学文化財研究施設運営委員　杉原重夫ほか）の内容をつがる市教育委員会の責任において編集したものである。なお、編集および本報告への掲載にあたっては、明治大学黒耀石研究センターの御許可をいただいた。

９．自然科学分析のうち、第５章第１節は株式会社加速器分析研究所、第５章第２節はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

１０．石器の石材については、一部を川村眞一氏（日本地学教育学会会員）に肉眼鑑定いただいた。

１１．巻末資料に再録した文献の中で、亀ヶ岡遺跡に関連しない文章・図表等については適宜省略し、あわせてレイアウトも部分的に改変した。

１２．本書に掲載した、つがる市教育委員会調査分の出土遺物・実測図・写真等の資料は、つがる市文化財収蔵庫に保管している。

１３．本書では、つがる市教育委員会が平成 28 年に刊行した『史跡田小屋野貝塚総括報告書』で十分に触れることのできなかった田小屋野貝塚の重要性について、付編として巻末に掲載した。

１４．付編第２節は斉藤慶吏氏（青森県教育庁文化財保護課、現 文化庁）より玉稿を賜った。

１５．つがる市教育委員会による発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、文化庁文化財部記念物課（現 文化財第二課）、青森県教育庁文化財保護課より御指導をいただいたほか、平成 20～22 年度はつがる市遺跡保存検

討会、平成 29～令和元年度は史跡亀ヶ岡石器時代遺跡等調査指導委員会を設置して委員の方々から御指導をいただいた。これらの調査指導体制については第１章第２節に記した。
青森県立郷土館所蔵資料の調査にあたっては、同館学芸課 杉野森淳子氏・岡本　洋氏のご協力をいただいた。
そのほか、本書の刊行に至るまでに下記の機関および個人のご指導・ご協力を賜った（敬称略・順不同）。

大館市立栗盛記念図書館　慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室　東京国立博物館　弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター　NPO 法人つがる縄文の会　農事組合法人亀ヶ岡みらい　館岡財産区管理会
荒谷伸郎　井関康博　市原壽文　小笠原雅行　岡本耕平　折登亮子　金子浩昌　工藤禮子　篠原和大
中門亮太　那須たみ子　辻 誠一郎　成田惠子　日浦　勉　水ノ江和同　宮武頼夫　森先一貴　伊井富美子
越後谷 清　越後谷伸子　小山内昭光　佐藤アイ子　佐藤重光　佐藤ノブ　佐藤文男　相馬和子　對馬千春
對馬康徳　野呂兼作　野呂篤司　野呂秀彦　野呂正利　野呂康生　野呂勇介　對馬利春　横山啓子

凡 例

1．つがる市教育委員会による調査区の名称は、その地点の字名と地番によった。その他機関の調査区名は、既刊報告書に従った。
2．つがる市教育委員会調査地点の遺構番号は、調査年度・調査区ごとに、遺構の種別に関係なく発見順の連番とした。
3．図版については、それぞれ縮尺を示した。ただし、遺物写真については縮尺を統一していない。
4．図中の座標は平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）の値であり、標高は東京湾中等潮位（T.P.）を基準とした値である。
5．図中の層位は、基本層序をローマ数字（Ⅰ・Ⅱなど）、遺構覆土を算用数字（1・2 など）で表記した。
6．土層の色調は、『新版　標準土色帖』15 版（小山ほか）を基準とした。
7．つがる市教育委員会調査地点の土層注記にある、混入物・内容物の土層に対する割合は、以下のとおりである。
混入：40～50%　多量：25～30%程度　中量：15～20%程度　少量：5～10%程度　微量：5%未満
8．検出遺構一覧表において、調査区設定や撹乱等の影響により遺構の部分的検出にとどまるものは、計測値を（　）表記した。
9．遺物図に示すスクリーントーンの指示は下記のとおりである。

：摩耗痕　：赤変　：付着物・塗布物

目　次

巻頭写真
序　文
例言・凡例
目　次

第１章　遺跡と調査の概要
第１節　調査および総括報告書刊行に至る経緯 …… 1
第２節　調査要項 …… 1
第３節　遺跡の概要 …… 3
第４節　遺跡周辺の地理的環境 …… 6
第５節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 15
第６節　つがる市教育委員会による調査の方法と経過…… 26

第２章　調査研究の歴史および亀ヶ岡コレクションの概要
第１節　江戸時代の亀ヶ岡 …… 29
第２節　蓑虫山人の発掘調査 …… 32
第３節　遮光器土偶の出土と佐藤蔀・神田孝平による報告 …… 34
第４節　東京帝国大学理学部所属の研究者による発掘調査と踏査 …… 35
第５節　沢根低湿地の発掘調査と「泥炭層遺跡・低湿地遺跡」としての評価の確立 …… 39
第６節　縄文土器研究の進展と「亀ヶ岡式」・「亀ヶ岡文化・文化圏」の用語の成立 …… 41
第７節　泥炭文化層解明を目的とした慶應義塾大学の発掘調査 …… 44
第８節　低湿地における古環境調査 …… 46
第９節　国内外の亀ヶ岡コレクション …… 47
第10節　東京国立博物館所蔵遮光器土偶解説 …… 53

第３章　史跡指定に至る経緯と遺跡保護への取り組み
第１節　遺跡の乱掘から史跡指定へ …… 57
第２節　戦前期における石器時代遺跡の史跡指定動向 …… 59
第３節　木造町への合併から亀ヶ岡考古館建設へ …… 59

第４章　発掘調査の結果
第１節　基本層序 …… 62
第２節　沢根低湿地の調査 …… 66
１．慶應義塾大学による調査（A・B トレンチ）…… 66
２．青森県立郷土館による調査（沢根 A ～ D 区）…… 78
３．青森県教育委員会による県道地点の調査 …… 99
第３節　近江野沢低湿地の調査 ……112
１．慶應義塾大学による調査（C・D 地点）……112
２．青森県立郷土館による調査 ……115
第４節　亀山丘陵の調査 ……118
１．亀山 36-1 地点の調査 …… 118　２．亀山 49-1・49-2 地点の調査 …… 132
３．青森県立郷土館による雷電宮地区の調査… 148　４．沢根 83-32 地点の調査…… 164
５．沢根 83-35 地点の調査 …… 170　６．亀山 57 地点、沢根 83-2 地点の調査… 171
７．沢根 83-9 地点の調査 …… 176　８．沢根 83-8 地点の調査 …… 185
９．沢根 83-52 地点の調査 …… 200　10．沢根 83-51 地点の調査…… 201
11．沢根 83-50 地点、沢根 83-56 地点の調査… 204　12．沢根 83-14・83-20 地点の調査 … 206
13．沢根 83-49 地点の調査 …… 210　14．沢根 83-5 地点の調査 …… 220
15．沢根 83-12・83-13 地点、沢根 83-17 地点、亀山 30 地点の調査 …… 231

16．沢根 83-12 地点の調査 …… 236　17．沢根 83-17 上地点の調査 …… 240
18．亀山 26-1 地点、亀山 24-1 地点の調査 … 245　19．館岡屏風山 373-1 地点、369-1 地点の調査 …246
20．市道地点の調査 …… 249
第５節　亀ヶ岡遺跡南側隣接地の調査 …… 254

第５章　自然科学分析
第１節　遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定 …… 256
第２節　土坑墓出土赤色顔料の成分分析 …… 261
第３節　漆塗り土器の科学分析 …… 266
第４節　黒曜石製遺物の蛍光 X 線分析 …… 281
第５節　亀ヶ岡遺跡における動物資源利用 …… 290

第６章　総括
第１節　日本考古学の発展に果たした亀ヶ岡遺跡の役割とその重要性
１．江戸時代における亀ヶ岡遺跡出土品の意義 …… 298
２．明治時代における亀ヶ岡遺跡の発掘調査と出土遺物報告の意義 …… 298
３．低湿性遺跡としての亀ヶ岡遺跡の特殊性と重要性 …… 299
４．基準資料としての亀ヶ岡遺跡出土資料の重要性 …… 299
５．美術工芸的価値としての亀ヶ岡遺跡出土資料 …… 300
第２節　発掘調査成果からみた亀ヶ岡遺跡の特質
１．発掘調査成果のまとめ …… 300
２．縄文時代晩期の竪穴建物跡・土坑墓群の特徴 …… 318
３．亀ヶ岡遺跡における玉製作と副葬行為 …… 322
４．丘陵縁辺部の土坑墓群と低湿地の遺物包含層との関係 …… 323
５．亀ヶ岡遺跡の時期別変化と環境変遷との関係 …… 324
６．隣接する田小屋野貝塚との関係 …… 324
第３節　亀ヶ岡文化圏における亀ヶ岡遺跡の位置付け
１．遺跡の存続期間について …… 325
２．晩期の遺跡構造について …… 327
３．晩期の墓制について …… 327
４．晩期における亀ヶ岡遺跡の特質……329
第４節　課題と展望
１．集落構造解明に向けた取り組み …… 331
２．史跡周辺域の保存管理 …… 331
３．史跡の整備活用 …… 331

巻末資料
亀ヶ岡遺跡関連資料再録 …… 333
亀ヶ岡遺跡関連文献一覧 …… 379

引用・参考文献 …… 385

写真図版 …… 389

付編　田小屋野貝塚総括
第１節　青森県立郷土館・つがる市教育委員会の調査概要 …… 432
第２節　田小屋野貝塚の重要性 …… 439

報告書抄録・奥付

第１章　遺跡と調査の概要

第1節　調査および総括報告書刊行に至る経緯

昭和 19（1944）年 6 月 26 日に文部省より史跡に指定された亀ヶ岡石器時代遺跡について、管理団体であるつがる市は平成 19･20 年度に史跡保存管理計画を策定した（つがる市教育委員会ほか 2009）。その際に、現在の地籍図上に復元した史跡指定範囲は、地形の切れ目ではなく土地境界線による線引きがなされていたことが判明した。遺跡南側の沢根低湿地の途中に史跡境界線が設定されるなど、現在の遺跡保護の観点からは昭和 19 年指定の史跡範囲が不十分であり、既指定地周辺における範囲内容確認調査を実施して遺跡の広がりを明らかにし、過去の調査成果も加味したうえで史跡追加指定を目指す必要性が明らかになった。

亀ヶ岡遺跡は江戸時代より遺跡の所在が知られ、明治 17・20 年の蓑虫山人（土岐源吾）による発掘調査が記録上最古のものである。全国の遺跡中でも、東京都品川・大田区の大森貝塚（明治 10 年）、茨城県美浦村の陸平貝塚（明治 12 年）、東京都文京区の弥生町遺跡（明治 17 年）などと並んで、日本の近代考古学史上最も古い時期に発掘調査が行われている。その後も継続的に大学や研究機関等による発掘調査が実施され、亀ヶ岡遺跡から出土した各種の遺物は日本考古学の発展に大きな役割を果たしてきた。また、史跡の指定時期についても、青森県内の縄文遺跡では亀ヶ岡遺跡に隣接する田小屋野貝塚とともに最も古く、いずれも戦時中に指定されている。こうした経緯を有する亀ヶ岡遺跡の学史上における意義を再評価する意味からも、過去の調査や史跡指定の経緯を総括する必要が生じた。

亀ヶ岡遺跡の所在する館岡地区は近世には集落が成立し、亀山丘陵上は近代以降宅地化や農地化が進んだ。昭和 19 年の指定当初より史跡内には住宅建物等が存在していたが、平成 20 年度時点で 18 軒の住宅が史跡内に所在していた。さらに、史跡周辺の周知の埋蔵文化財包蔵地内にも多数の住宅が所在するとともに農地化が進んでおり、農地の耕作深度や井戸掘削に関する照会も教育委員会に寄せられた。こうした状況に加え、館岡地区には上下水道が未敷設であり、平成 20 年度に敷設計画が生じたことから、将来的な遺跡・史跡の保存の在り方を検討するためにも、上水道本管の敷設が計画された道路敷地内や農地における地下の包蔵状況を確認する必要が生じた。

以上のことから、文化庁・青森県教育委員会の指導のもと、つがる市教育委員会では平成 20 年度から史跡の西側隣接地で範囲内容確認調査を実施し、平成 25 年度以降は公有地化した史跡地の内容確認調査も実施してきた。主に丘陵地を対象としてつがる市が実施した平成 20～22・25～29 年度までの計 8 か年の発掘調査結果と、主に南北低湿地を対象として過去の大学・研究機関等が実施した調査結果を総合的に検討して作成したのが本総括報告書である。

第2節　調査要項

1. 調査目的

過去の大学・研究機関等による調査地点が主に沢根・近江野沢の南北低湿地に集中しており、その間の亀山丘陵における遺跡の包蔵状態は詳細が不明であった。水道管敷設工事や耕作深度等の各種開発行為に対し、教育委員会として適切に対応するための情報を得るため、平成 20～22 年度には周知の埋蔵文化財包蔵地内の亀山丘陵上において範囲内容確認調査を実施した。史跡西側隣接地における範囲内容確認調査は平成 26～29 年度にも継続的に実施した。

史跡内については、平成 25 年度に井戸掘削に伴う現状変更判断のための試掘調査が実施されたほか、平成 25・29 年度には史跡南側と北側の未調査地区において、縄文時代晩期の集落構造解明を目的とした内容確認調査を実施した。

2. 調査期間および調査地点等

平成 20 年度

調査期間：平成 20（2008）年 10 月 20 日～11 月 28 日

調査地点：つがる市木造亀ケ岡亀山 30、木造館岡沢根 83-12・83-13・83-17・83-14・83-15

調査面積：120 ㎡

平成 21 年度

調査期間：平成 21（2009）年 9 月 1 日～12 月 11 日

調査地点：つがる市木造館岡沢根 83-49

調査面積：100 ㎡

平成 22 年度

調査期間：平成 22（2010）年 10 月 20 日～11 月 29 日

調査地点：つがる市木造館岡沢根 83-37 ほか

調査面積：60 ㎡

平成 25 年度

調査期間：平成 25（2013）年 7 月 16 日～12 月 6 日

調査地点：つがる市木造亀ケ岡亀山 49-1・49-2、木造館岡沢根 83-32・83-52

調査面積：220 ㎡

平成 26 年度

調査期間：平成 26（2014）年 6 月 9 日～6 月 19 日（亀ヶ岡遺跡隣接地）
平成 26（2014）年 6 月 20 日～11 月 7 日（亀ヶ岡遺跡）

調査地点：つがる市木造上稲元 176-84 ほか（亀ヶ岡遺跡隣接地）
つがる市木造亀ケ岡亀山 57・59-1、木造館岡沢根 83-56・83-17（亀ヶ岡遺跡）

調査面積：130 ㎡（亀ヶ岡遺跡隣接地）、84 ㎡（亀ヶ岡遺跡）

平成 27 年度

調査期間：平成 27（2015）年 7 月 1 日～10 月 19 日

調査地点：つがる市木造亀ケ岡亀山 24-1・26-1、木造館岡沢根 83-5・83-12

調査面積：253 ㎡

平成 28 年度

調査期間：平成 28（2016）年 9 月 1 日～11 月 21 日

調査地点：つがる市木造館岡沢根 83-8・83-50・83-51・83-14・83-20

調査面積：273 ㎡

平成 29 年度

調査期間：平成 29（2017）年 7 月 3 日～11 月 30 日

調査地点：つがる市木造亀ケ岡亀山 33・36-1、木造館岡沢根 83-9・83-49

調査面積：295 ㎡

3. 調査主体者･調査組織等

調査主体者：つがる市教育委員会（補助事業者　つがる市）

調査担当者：佐野忠史　つがる市教育委員会社会教育文化課学芸員（平成 20～22・25～27 年度）
羽石智治　つがる市教育委員会社会教育文化課学芸員（平成 28・29 年度）

調査指導機関：

文化庁文化財部記念物課・青森県教育庁文化財保護課

つがる市遺跡保存検討会（平成 20～22 年度）

会　長　村越　　潔　　弘前大学名誉教授

副会長　川村　眞一　　日本地学教育学会会員・元青森県弘前工業高等学校長

委　員　小山内　壽一　青森県文化財保護指導委員

史跡亀ヶ岡石器時代遺跡等調査指導委員会（平成 29～令和元年度）

委員長　高橋　龍三郎　早稲田大学文学学術院教授・先史考古学研究所所長

委　員　関根　達人　　弘前大学人文社会科学部教授・北日本考古学研究センター長

渡辺　丈彦　　慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室教授

工藤　竹久　　元八戸市博物館長

小林　　克　　前秋田県埋蔵文化財センター所長

岡田　康博　　青森県企画政策部理事　世界文化遺産登録推進室長

オブザーバー　青森県教育庁文化財保護課

事務局：

つがる市教育委員会社会教育文化課（平成 24 年度まで文化課）　文化財保護係

教育長　　葛西嶜輔（平成 20～令和元年度）

教育次長　半田　修（平成 20・21 年度）　宮本裕士（平成 22～24 年度）

教育部長　野呂金弘（平成 25・26 年度）　三上みつる（平成 27 年度）

木村好秀（平成 28 年度）　長内信行（平成 29・30 年度）

坂本潤一（令和元年度）

教育推進監　高橋和久（平成 20・21 年度）　須藤紳逸（平成 22・23 年度）

工藤秀美（平成 24・25 年度）

課　長　　須藤紳逸（平成 20 年度）　小寺　保（平成 21・22 年度）

三上みつる（平成 23～26 年度）　對馬誠貴（平成 27・28 年度）

成田幸成（平成 29～令和元年度）

課長補佐　對馬誠貴（平成 20～21 年度）　三浦貴彦（平成 22～26 年度）

奈良陽一（平成 24～25 年度）　鳴海義仁（平成 26～29 年度）

佐々木浩樹（平成 30・令和元年度）

係　長　　野呂有恵子（平成 20～22 年度）　蝦名紀子（平成 23 年度）

羽石智治（平成 30・令和元年度）

学芸員　　佐野忠史（平成 20～28 年度）　羽石智治（平成 20～29 年度）

堀内和宏　木戸奈央子　小林和樹（平成 30・令和元年度）

第3節　遺跡の概要

つがる市は青森県の西部に位置し、253 ㎢の面積を有する。市内には令和元年６月現在 113 か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。亀ヶ岡遺跡（遺跡番号 209002）はつがる市木造市街地の北北西約 9.5 ㎞に位置し、つがる市木造亀ケ岡亀山・木造亀ケ岡近江野沢・木造館岡沢根に所在する（図 1-1）。

亀ヶ岡遺跡は、岩木山北麓に連なる丘陵であり、日本海と並行して南北約 30 ㎞、東西３～５㎞にわたり広がる屏風山砂丘地帯東縁部に位置する。遺跡周辺は、砂丘地帯の台地を津軽平野に向かって

図 1-1　亀ヶ岡遺跡位置図

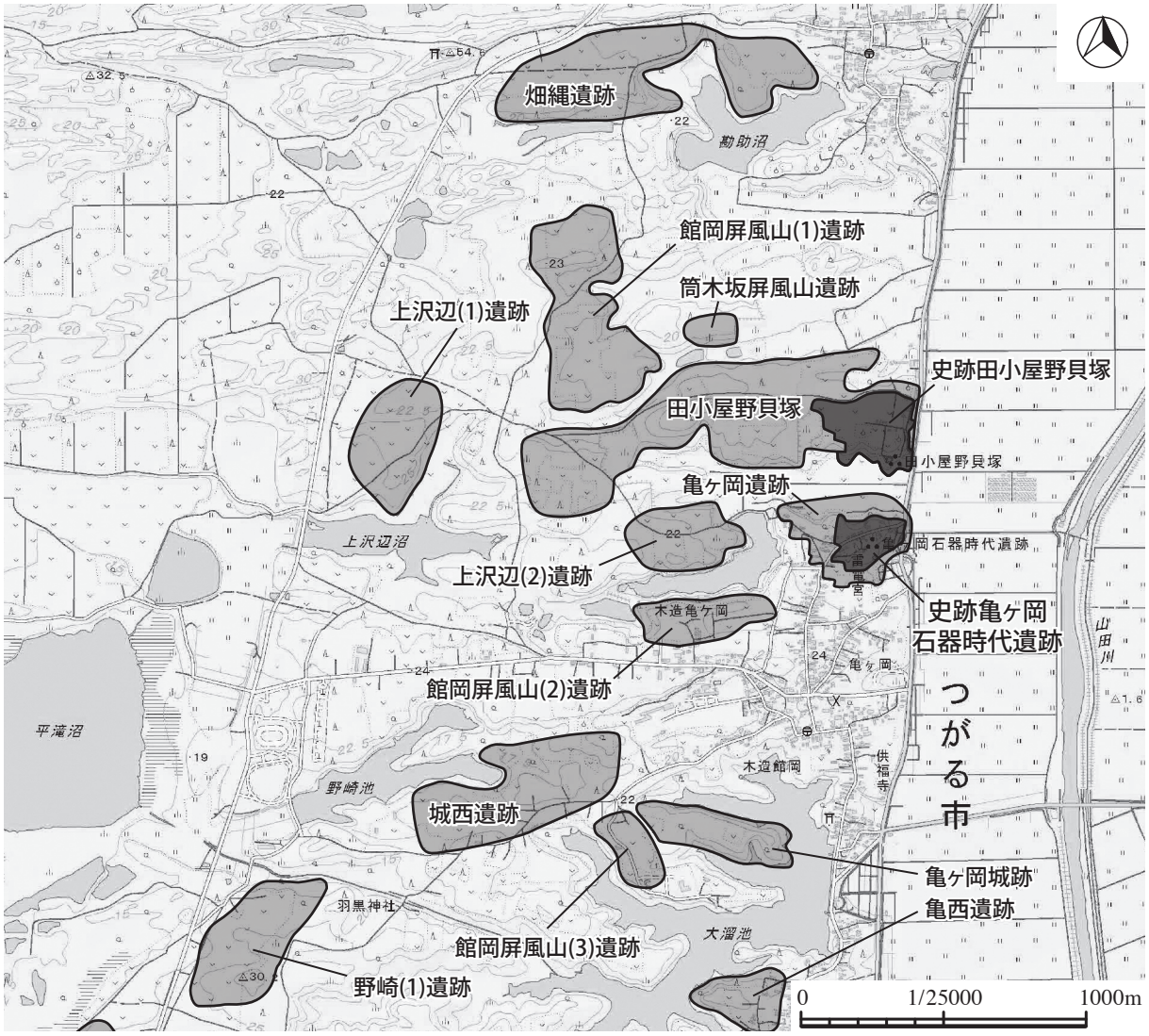


図 1-2　亀ヶ岡遺跡および周辺遺跡位置図

東西方向に開析する谷によって、複数の尾根状地形が平行に並んでいる。

亀ヶ岡遺跡は、標高７～18mほどの丘陵東南端部とその南北の標高３～４mほどの低湿地にまたがって立地する縄文時代晩期を中心年代とする遺跡である（図 1-2）。丘陵と低湿地を含む東西 460m、南北 320mほどの範囲が周知の埋蔵文化財包蔵地に登録され、丘陵部が亀山地区、北側低湿地が近江野沢地区、南側低湿地が沢根地区と呼称される。現在の史跡指定地はその東部にあり、1944（昭和19）年 6 月 26 日に北隣の田小屋野貝塚とともに指定されている。史跡指定名称は「亀ヶ岡石器時代遺跡」であり、指定範囲の面積は 38,887.99 ㎡となる（つがる市教育員会ほか 2009）。

遺跡の載る台地の東側に展開する津軽平野は、約 9,000 年前から開始される「縄文海進」の際には、「古十三湖」の汽水域が広がっていた（辻・佐野 2015）。亀ヶ岡遺跡の北側約 200mに位置する田小屋野貝塚は縄文時代前期中葉から中期末葉にかけての集落遺跡であり、古十三湖から採取されたヤマトシジミを主体とする縄文時代前期中葉および中期初頭の貝塚を伴うことが判明している（青森県立郷土館 1995、つがる市教育委員会 2016）。

第4節　遺跡周辺の地理的環境

小岩直人（弘前大学教育学部）

1. 亀ヶ岡遺跡の地形環境

亀ヶ岡遺跡が位置する津軽平野は，北および東を新第三紀層からなる津軽山地，西を屏風山砂丘地帯，南西を岩木火山，南を白神山地に囲まれた東西幅 5～20km，南北約 60km に達する盆地状の平野である（海津，2005）。津軽平野では，中央部を白神山地に源流部を有する岩木川が流下している。岩木川は，奥羽山脈から流下する諸河川が流入する平川と弘前市付近で，北部では津軽山地から流れるいくつかの河川と合流，最下流部において十三湖へ注ぐ河川である（図 1-3）。十三湖へは岩木川の他，津軽山地から流下する鳥谷川，岩木山に源を発し亀ヶ岡遺跡の前面を流れる山田川も流入している。岩木川の最下流部に位置する十三湖は，面積約 18 km^2，最大水深 2m の湖沼であり，長さ約 5 km，幅約 500 m の砂州が発達し，日本海から隔てられている(平井，1994)。

津軽平野の地形は，中期更新世以降に形成された「洪積台地」と，縄文海進以降の沖積作用により形成された「沖積平野」に大別される。弘前市北部～五所川原市においては沖積平野に区分される氾濫原が広がり，現河道や旧河道沿いには自然堤防の発達が良好となっており，藤崎町，板柳町，鶴田町，五所川原市などの市街地は，おもにこの地形上に発達している。一方，後背湿地は水田として利用されている。沖積平野の中でも下流側は，縄文海進時には，五所川原市北部とつがる市木造を結ぶ線あたりまで海域となり，その後，岩木川などの河川が運搬した土砂によって埋積された沖積平野であることが指摘されている（小貫ほか，1963；海津，1976；以後，縄文海進以降に水域が埋積された平野を臨海沖積低地とする）。岩木川の最下流部の十三湖は，その埋め残しの水域である（図 1-3）。

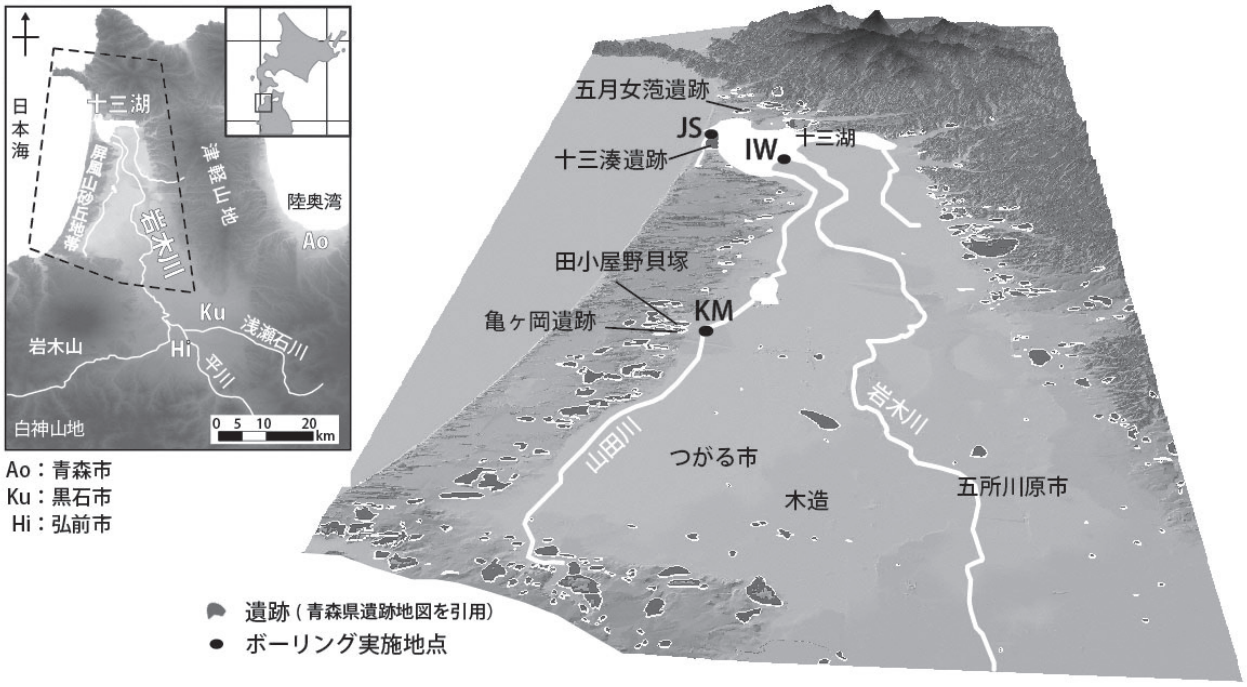


図 1-3　調査地域の概観と遺跡分布（小岩，2019）
国土地理院10mメッシュDEMを用いてArcGIS10.5を援用し作成した鳥瞰図.遺跡分布は青森県(2008)による。ボーリング地点，KM：亀ヶ岡コア，IW：岩木川河口コア，JS：十三コア

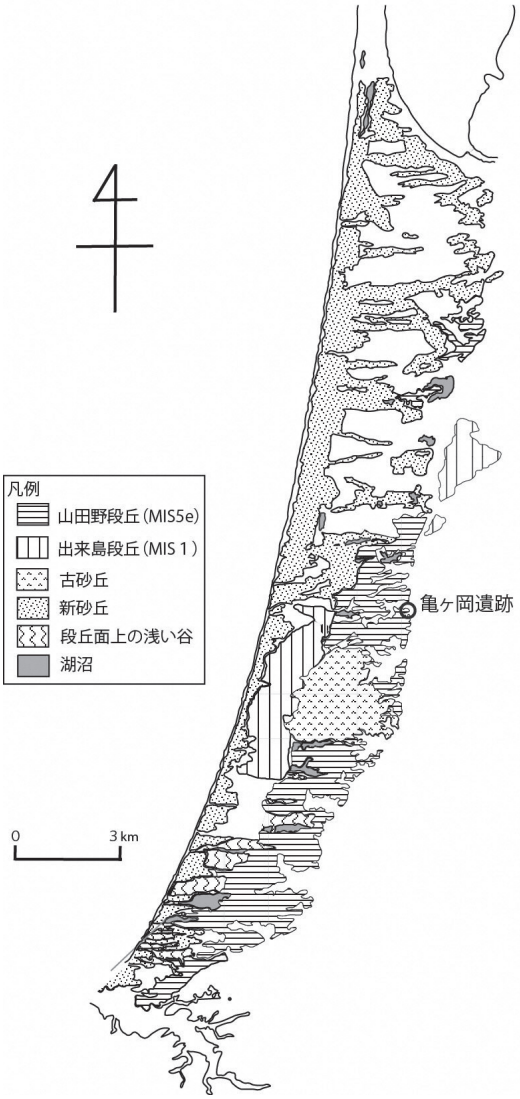


図 1-4　屏風山砂丘地帯の地形分類図
角田（1978），小池・町田（2001）を参考に作成．砂丘に関しては，角田（1978）で示された古砂丘を除いた砂丘地を新砂丘として示している．

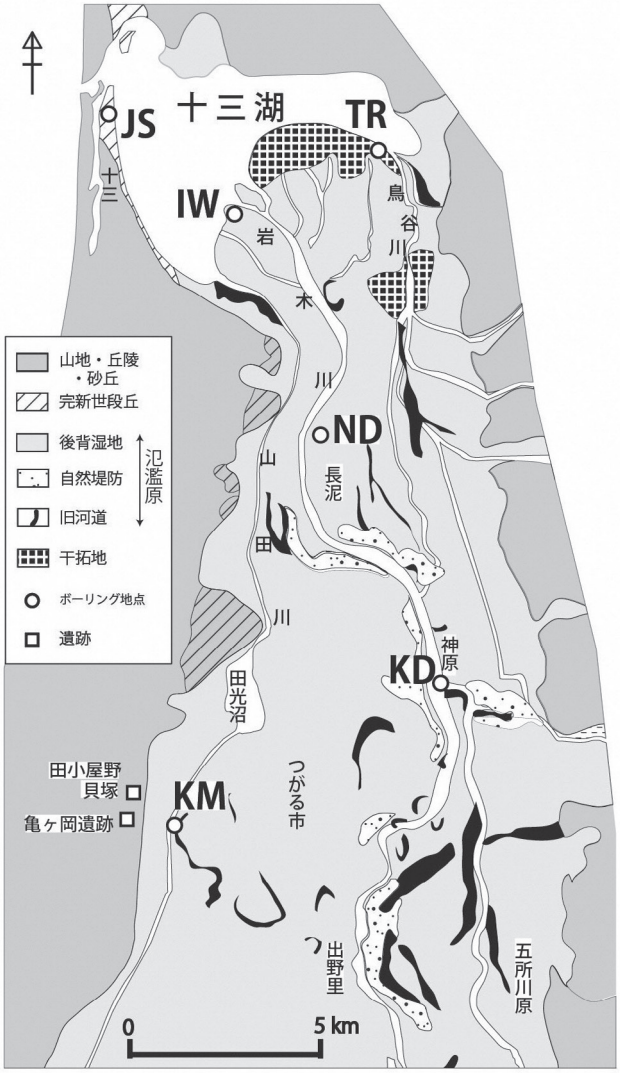


図 1-5　津軽平野北部の地形分類図
（葛西・小岩，2014）

沖積平野を取り囲むように洪積台地が分布するが，上流側となる平野南部においては，段丘化した扇状地からなり，弘前市や黒石市のおもな市街地は，この台地上に位置している。また，下流側の臨海沖積低地の縁辺の台地は，約 12～13 万年前の最終間氷期（海洋酸素同位体ステージ 5e；MIS5e）に形成された海成段丘面からなっている。日本海に面している屏風山砂丘地帯では，これらの海成段丘面を砂丘が被覆しており，海岸線と平行して発達する横列砂丘と，直交方向に伸びる縦列砂丘，ヘアピン状の砂丘などが多くみられる。また，屏風山砂丘地帯の東部では，段丘面を刻む開析谷が発達しており，現在，これらの谷を人工的に堰き止めた溜池が多くみられ，沖積平野へ農業用水が供給されている。

亀ヶ岡遺跡は，洪積台地と沖積平野の境界に位置しており，小地形スケールでの区分では海成段丘面，およびこれを侵食して形成された開析谷の両者に分布している。開析谷では厚い泥炭層が堆積する低湿地となっていて，多くの遺物はここから出土している。

2. 地形環境と遺跡立地

はじめに，津軽平野における遺跡と地形との関係を検討する。平野北西部に位置する屏風山砂丘地帯には，山田野段丘，および出来島段丘とよばれる段丘面が広く分布している（小貫ほか，1963：図1-4)。山田野段丘は，屏風山砂丘地帯の南部，とくに東側ではMIS5eの海成段丘面の分布が良好となっている。段丘堆積物の直上を洞爺火山灰（Toya：町田・新井，2001）が被覆することから，山田野段丘は最終間氷期の MIS5e に形成された海成段丘面であると考えられている（吾妻，1995)。また，砂丘地帯の西側の出来島，および東側の牛潟周辺には完新世段丘である出来島段丘が発達している（図1-4)。

屏風山砂丘地帯では，前述の段丘面の上を広く砂丘が覆っている。砂丘は，更新世末期の古砂丘，完新世の旧砂丘，新砂丘に区分されている（遠藤，1996)。砂丘の形成年代について，辻・佐野（2015）は旧砂丘を縄文海進高頂期以降に形成された砂丘であるとし，遠藤（1996）は新砂丘と古砂丘の間にみられるクロスナ層から白頭山苫小牧テフラ（B-Tm）をみいだし，新砂丘は B-Tm 降下後，多少の時間をおいて形成されたものであることを指摘している。また，角田（1978）は，北部において新砂丘に覆われる考古遺物の年代から，新砂丘の形成が室町時代以降に活発になったことを報告している。近年，砂丘砂そのものの年代測定も行われ，十三湖北岸に位置する五月女萢遺跡において，有機物の ^{14}C 年代測定とともに砂丘砂のルミネッセンス年代測定が実施されている（田村，2017)。それによると，遺跡にみられるクロスナ層の下位の砂層は，縄文海進の後に形成された約 4000 年前頃の海岸砂丘であることが示された。この年代は，辻・佐野（2015）が示した旧砂丘の年代観と矛盾しない。上位の砂丘は 1200～940 年前の年代を示し，遠藤（1996）が示した新砂丘の形成年代と調和的となっている。

図 1-3 に青森県の遺跡分布図と，国土地理院の 10m メッシュ DEM を用いて作成した陰影図を重ねあわせたものを示す。このように津軽平野北部においては，遺跡は沖積平野よりも周辺の台地や丘陵地に分布が多いことがわかる。土地分類基本調査（国土交通省国土調査課実施）による地形分類図と，青森県遺跡地図による遺跡分布の重ねあわせを行った大塚（2005）は，津軽平野北部における遺跡は，その多くが海成段丘面上に位置していること，縄文時代の遺跡に限定した場合には，その比率は約９割にも達していることを報告している。また，弥生時代には遺跡数は激減し，その後の平安期には遺跡数が増加するが，平安期おいても約８割の遺跡が段丘面上に存在しているという（大塚，2005)。屏風山砂丘地帯の北部は，新砂丘の分布が広がっているが，遺跡はほとんど分布していない。これは，屏風山砂丘地帯北部において存在していた遺跡が新たな砂丘の下に埋没している可能性も考えられるが，詳細は不明である。

3. 縄文時代以降の臨海沖積低地の地形発達

このように，津軽平野では台地上に人々の生活の痕跡が数多く認められること，また，台地の前面に広がる場所は，縄文時代において，海進により水域となり，それが河川の運搬する土砂により埋積されるという劇的な環境変化が生じていることを考えると，遺跡の立地を考える上で，臨海沖積低地の環境変遷を明らかにすることは重要な課題と思われる。

津軽平野，とくに北部の臨海沖積低地の地形発達史に関する研究は，小貫ほか（1963)，海津（1976）などにより行われてきた。小貫ほか（1963）は，津軽平野の沖積層の基本層序を示し，十三湖は縄文海進以降の海域が縮小する過程で形成された海跡湖であることを指摘した。また，海津（1976）は，河口付近でのボーリング試料の珪藻分析に基づき，完新世中期以降の十三湖の詳細な古地理変遷について明らかにした。その後，小岩ほか（2014)，葛西・小岩（2014）は，新たなボーリングを実施し，それらの試料の諸分析に基づいて地形発達を考察した。本稿は，亀ヶ岡遺跡周辺を含む地域でボーリ

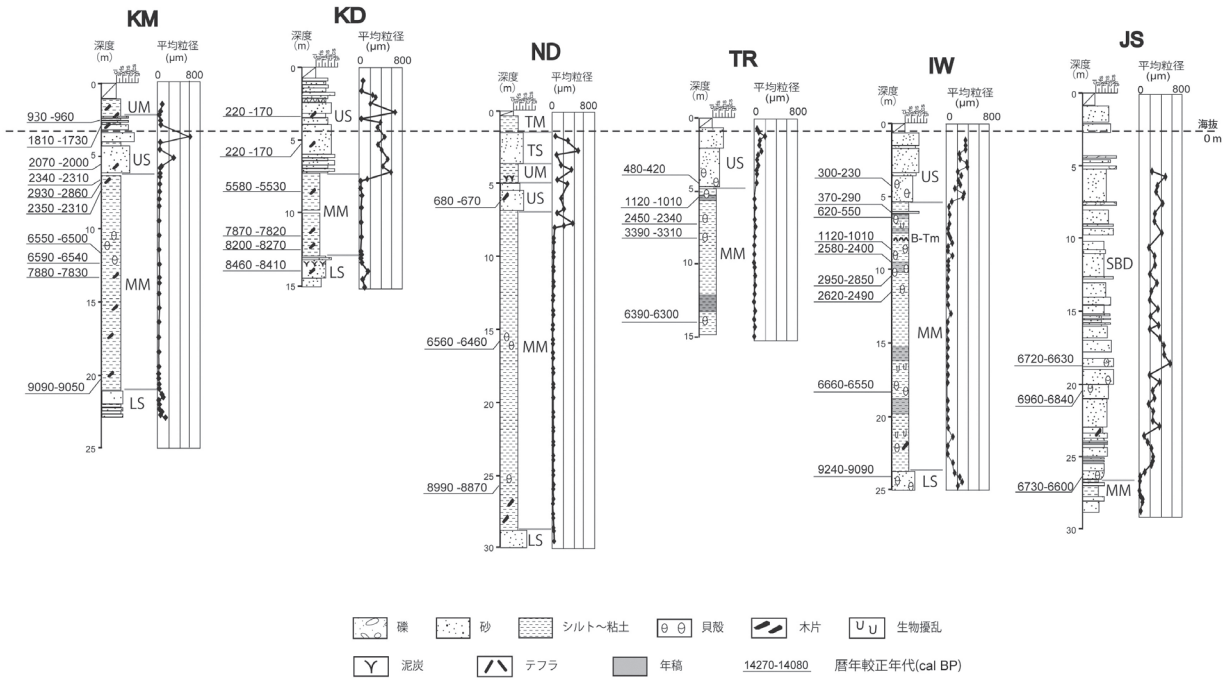


図 1-6　津軽平野北部におけるボーリング柱状図（葛西・小岩，2014）

ングを実施，コアの分析から地形発達史を考察した小岩ほか（2014），葛西・小岩（2014），小岩・葛西（2015）の研究成果を整理し，亀ヶ岡遺跡周辺の縄文海進以降の古環境の変遷と遺跡の立地について述べる。なお，この整理内容は，小岩（2019）において報告したものである。

葛西・小岩（2014）は，津軽平野北部におけるオールコアボーリング５本，および堤防工事に伴って行われたボーリング１本のコアを用いて，層相観察，珪藻分析，イオウ分析，粒諸分析度分析，^{14}C 年代測定の諸分析により地形発達を明らかにしている（図 1-5・図 1-6）。

津軽平野の内陸側の 5 本のコア（KM コア，KD コア，ND コア，TR コア，IW コア）は，厚いシルト～粘土層を主体とするが， JS コアでは砂州の構成層が厚く堆積している（図 1-6）。これらのコアの沖積層の層序は下位より，砂礫層からなる沖積層基底礫層（BG），粗粒砂～細砂と腐植物や木片を含むシルト層の互層である下部砂層（LS），貝殻片を混入するシルト～粘土からなる中部泥層（MM），顕著な上方細粒化がみられ，デルタの前置層に相当する上部砂層（US），木片などを含む有機質なシルト層の上部泥層（UM），中粒砂からなる最上部砂層（TS），シルトからなる最上部泥層（TM）に大別される。LS は，縄文海進による海面上昇に伴って堆積した氾濫原堆積物であり，MM は縄文海進以降に水域となった海底・湖底で堆積した細粒物質である。MM の上位を被覆する US は水域に前進してきた土砂の埋積による堆積物（デルタ堆積物）を示す。また最上部の UM，TS は陸域となった以降の河川の氾濫による堆積物と解釈できる。このような堆積物の解釈，およびそこに挟在する木片や貝殻で得られた試料の年代測定，おもに MM に残されている珪藻化石やイオウ含有量の分析から，津軽平野北部では以下の地形環境変化が復元されている（図 1-7：小岩，2019）。

最終氷期には陸域だった現在の岩木川河口部周辺は，約 9200 cal BP に縄文海進が及んで水域となり，縄文時代早期～前期に相当する 7000 cal BP 前後には塩分の高い海域へ変化する。この海域は 7000 cal BP 以降に発達する砂州により日本海と隔てられ，十三湖の原形がつくられる。当時の水域は，現在の十三湖よりも水深・面積ともに大きく，容積はおよそ 100 倍以上を有していたと推定される（図 1-7）。砂州の形成後も，正確な位置は不明であるものの潮流口が存在し，海水が十三湖に流入していたと考えられる。水深，容積とも大きな湖に流入した海水は，淡水に比べて比重が大きいこと，水深の大きな湖沼では湖底付近まで風波の影響が及ばずに湖水が循環しにくいことから，海水は湖底

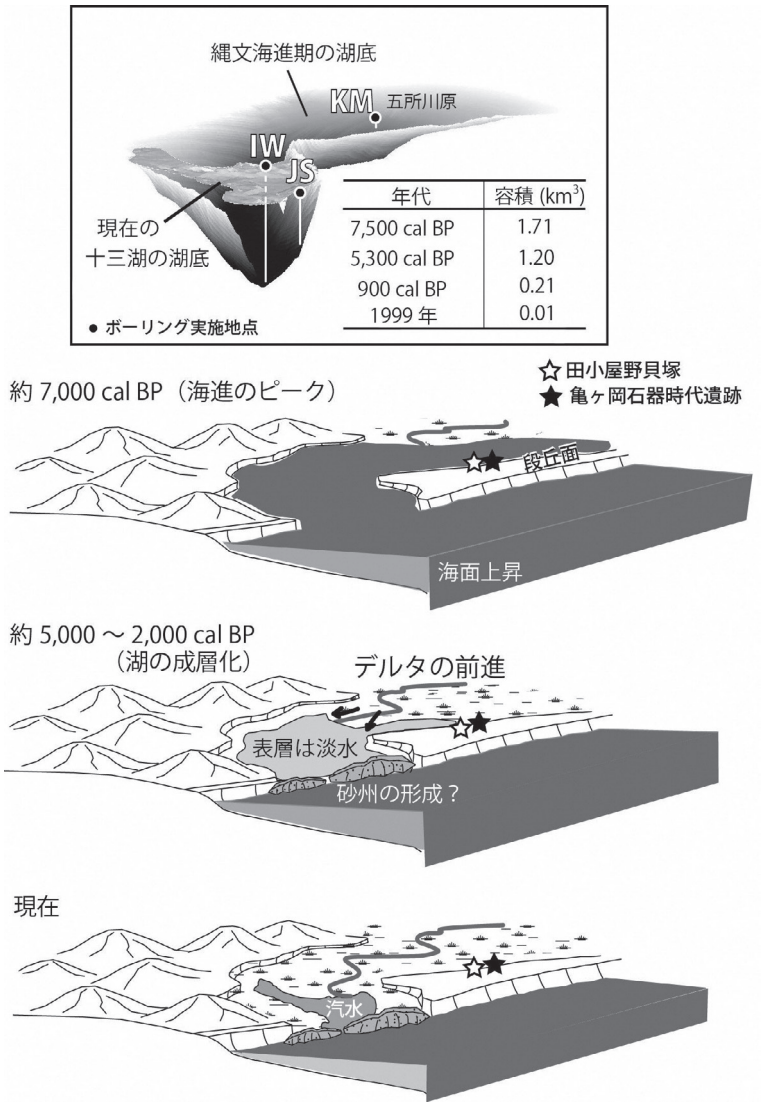


図 1-7　津軽平野北部の縄文海進高頂期以降の地形発達模式図（小岩，2019）
北西方向から津軽平野を望んだ鳥瞰図.

に貯留したものと考えられる。一方，表層では岩木川等の河川水の流入により淡水が優勢であるため，当時の十三湖は成層化が進んでいたと推定されている（小岩ほか，2014）。湖水の成層化は湖底付近の酸素の欠乏を示し，湖底では生物にとっては極めて厳しい環境であったと推定される。この状態は，約 6000 cal BP 以降に強まり，約 5300～2300 cal BP には，表層はほぼ淡水の湖沼となる。しかし，この期間でも約 3500～2300 cal BP は，淡水が優先していながらも，潮流口からの海水の流入が表層にも影響を与え始めた環境であったと推定される。また，海津（1976），葛西・小岩（2014）は，亀ヶ岡遺跡が位置する臨海沖積低地の西部では，比較的，遅くまで水域が残っていたことを推定している。

4. 亀ヶ岡遺跡周辺におけるボーリング調査

小岩・葛西（2015）は，縄文時代前期以降の環境変化を復元するため，亀ヶ岡遺跡から約 700 m 東に位置する地点でボーリング調査を実施した（KM コア，標高 3.2 m，掘削深度 23 m）。図 1-8 に KM コアにおける地質柱状図および珪藻ダイアグラムを示す。KM コアでは，基底には砂層およびシルト層の互層からなる LS，深度約 21m よりも上位において層厚 15m のシルト層を主体とする MM，さらに上位には層厚 3m の砂層である US，層厚 2m のシルト層からなる TM を確認することができる。

KM コアの深度 21～8m の堆積物は，平均粒径が 20 ㎛以下の粒度の細粒なものとなっている（図 1-6）。一般に 20～30μm よりも細粒な物質は浮流によって運搬されることが知られていることから（たとえば山口ほか，2005），KM コア付近において水域に堆積した MM は，河川から運搬された土砂のうち細粒なものが浮流し堆積したものであり，デルタフロントの前面に位置するプロデルタの堆積物であると推定される。深度 8m 前後から上方にむかって，上方細粒化を示すことから，この層準において，シルト層が堆積するような環境から徐々に河口が近づきデルタフロント堆積物が堆積するような環境へ変化したことが推定できる。少なくとも 2300 cal BP には，デルタフロントが到達したと考えられるであろう（小岩・葛西，2015）。

次に，湖水環境変遷について KM コアの珪藻分析を実施した葛西・小岩（2014）の成果を整理して述べる。本コアは，各層準を特徴づける珪藻種から Ⅰ～Ⅲ帯の珪藻帯に区分される（葛西・小岩，2014；

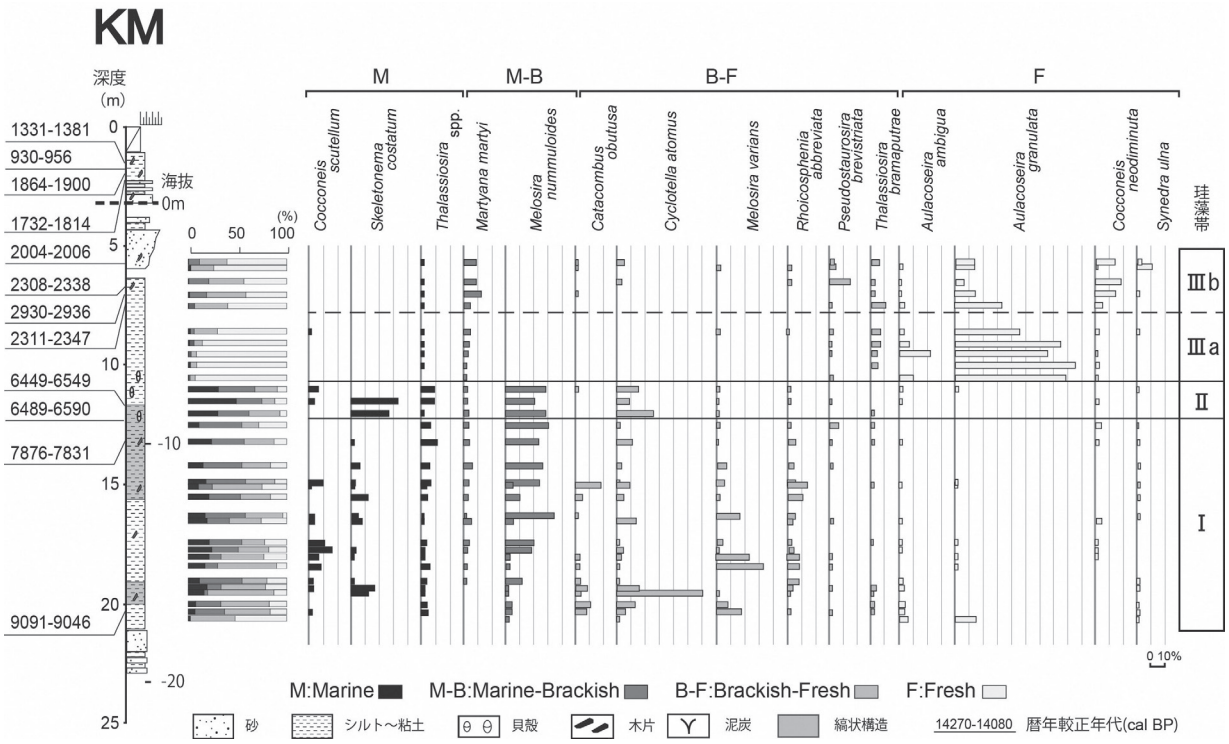


図 1-8　亀ヶ岡コア（KM）における 14C 年代と珪藻ダイアグラム
葛西・小岩（2014）を一部修正・加筆

図 1-8)。

Ⅰ帯（深度 20.60～12.50 m）では，汽水生種が優占する。ここでは，海-汽水生種の *Melosira nummuloides*（汽水藻場指標種群）が 10～30%，汽-淡水生種の *Cyclotella atomus* が 10～60%，*Melosira varians* が 10～30%を占める。海水生種も 10～20%でみられ，*Skeletonema costatum*（内湾指標種群），*Cocconeis scutellum*（海水藻場指標種群）が確認される。以上から，本帯は汽水環境，ラグーンが形成されていた可能性が示される。

Ⅱ帯（深度 12.50～11.00 m）は，海水生種が 30～50%と優占する。その中でも *S. costatum* が 30%前後でみられ，*Thalassiosira spp.*（内湾指標種群）が 10%産出する。また，Ⅰ帯で優占していた海-汽水生種の *M. nummuloides* は引き続き多くみられ 20～30%の割合で産出する。Ⅱ帯は，Ⅰ帯と同様の内湾環境であったと推定されるが，海水の流入量が増加し，塩分濃度が高まった可能性を指摘することができ，内湾環境が推定される。この時期は，縄文海進高頂期を示す。

Ⅲ帯（深度 11.00～5.70 m）は，淡水生種の *Aulacoseira granulata*（淡水浮遊生種群）が多産し，その出現頻度によりⅢa とⅢb 帯に区分することができる。Ⅲa 帯（深度 11.00～7.50 m）は淡水生種が 70～90%で優占し，汽水生種は 5～30%，海水生種も 5%未満と少ない。淡水生種の中では *A. granulata* が 40～85%と優占し，これに随伴して *Aulacoseira ambigua* が 5～20%産出するので，Ⅲa 帯は *Aulacoseira* 属で占められた環境であったといえるであろう。以上よりⅢa 帯は，Ⅱ帯の内湾環境から一転して，淡水湖沼環境へ変化したことを示す。しかし，海水生種の *Thalassiosira spp.*も 10%前後産出するため，時折海水の流入があったことが示唆される。Ⅲb 帯（深度 7.50～5.70 m）では，淡水生種は 40～70%，汽水生種は 20～55%出現する。Ⅲa 帯で多産した *A. granulata* が 7～15%と低下するため，全体の淡水生種の比率も低下する。Ⅲb 帯では汽-淡水生種の *Thalassisira bramaputrae*, *Pseudostaurosira brevistriata* が 10%前後で増加し，海-汽水生種の *Martyana martyi*

も 10%前後出現する。以上から，Ⅲb 帯はⅢa 帯より海水の影響が及ぶ汽水環境であったと推定される。

これらの堆積物の特徴や珪藻分析結果から復元される湖水環境，および柱状図に示される年代測定結果をもとに、KM コア周辺の環境変化の復元を試みる（図 1-9）。亀ヶ岡遺跡周辺は，岩木川河口部に海水が浸入したとほぼ同時期である約 9000 cal BP 以降に海進が及び水域へと変化する。これは，当時の海進が，現在の河口部付近から亀ヶ岡遺跡付近まで一気に及んだことを示す。結果として，約 7000 cal BP 頃に海水生種の珪藻が増加にみられるような塩分の高い環境となる。その後，淡水生種の珪藻の著しい増加がみられ，それは 3000 cal BP を若干遡る時期から減少し海水生種の珪藻も混入するようになる。

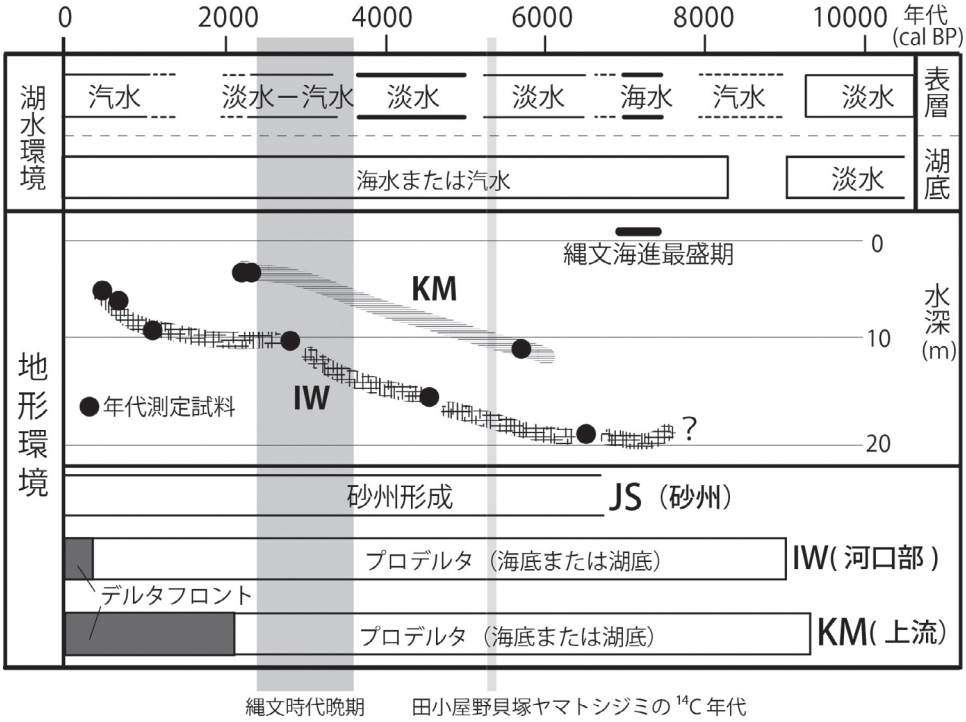


図 1-9　十三湖の古環境変遷

小岩ほか（2014），小岩（2019）に加筆・修正．ボーリング地点ごとの古水深，古環境を示している．ボーリング地点 KM：亀ヶ岡コア，IW：岩木川河口コア，JS：十三（砂州）コア

津軽平野西部の海成段丘面上には縄文時代前期～中期の遺跡である田小屋野貝塚が立地する。この遺跡では, 2012 年のつがる市教育委員会の発掘調査時に，縄文時代前期の成人女性の人骨が出土している。人骨を覆う貝層最下部のヤマトシジミの貝殻から 5480-5380calBP（IAAA-121735）の年代値が得られている（小岩・葛西，2015）。この時期は，十三湖の塩分が高かった環境から淡水環境への移行期に相当するともいえる（図 1-9）。

KM コア地点では，縄文海進以降継続していたプロデルタの堆積物が MM の上部の深度約８m（標高約-5m）から粗粒化が開始され，深度６m（標高約-3m）では砂層へと変化する。このような上方粗粒化は、縄文海進により水域となった場所にデルタが到達した時期，上部の砂層の堆積はデルタフロントの到達を示し，その時期は約 2300 cal BP であると推定される。すなわち，亀ヶ岡で人間生活が営まれていた縄文時代晩期は、デルタが形成される直前の時代で上方粗粒化がみられる MM が堆積した時期，水域に河口が近づいて来た時期であると思われる。

ところで，縄文海進最盛期以降，現在と大きく海水準が変化しないと仮定すると，当時の湖底に堆積したものと考えられるボーリングコアにみられる年代試料の標高から，各時代のその地点での十三湖のおおよその水深を求めることが可能である（小岩ほか，2014）。KM コア地点の水深は，約 5000 cal BP には約 10m，縄文時代晩期には３～４m 程度であったと推定することできる。その水域は，淡水の影響が強かった時期から汽水への移行期にあたり，現在の十三湖に比べて塩分は低いものの，

海水の影響も及ぶような環境にあったといえるであろう。

このような状況から，亀ヶ岡遺跡で人間生活が営まれていた縄文時代晩期は，亀ヶ岡遺跡周辺の台地の前面には，河口部に近い地形環境が存在していたと推定される。ただし，前述のように亀ヶ岡石器時代遺跡の遺物の多くは，台地を刻んだ開析谷に堆積した泥炭層およびその上部の粘土層から出土している。泥炭層の年代は，縄文時代中期を遡るものも報告されていることから，ボーリング地点では縄文時代晩期まで水域が残されているが，亀ヶ岡遺跡周辺，とくに開析谷およびその谷底は，すでに陸地の環境であったことが示唆される。これらの開析谷は最終氷期の低海面期に谷が掘れて形成されたものであり，その後の縄文海進時に溺れ谷となったものと推定される。この溺れ谷が，海進時に谷の出口付近に発達した砂州（海津，1976）や十三湖のデルタの発達等によって閉塞された結果，排水不良となり泥炭層からなる低湿地が形成されたといえるであろう（小岩，2019）。

他の遺跡では縄文時代晩期における環境は，どのようなものだったのだろうか。亀ヶ岡遺跡よりも潮流口の近くに位置する五月女萢遺跡は，縄文時代後期～晩期の土坑墓を中心に形成された大規模な遺跡であるが，市浦村教育委員会や五所川原市教育委員会により遺跡発掘調査が行われ，縄文時代晩期中葉のヤマトシジミ主体の貝層を含む遺物包含層がみいだされている。この時期の十三湖は，淡水が優先しながらも海水の流入が湖水に影響を与えていることから，十三湖の潮流口付近では，頻繁に海水が入り込みヤマトシジミの生育に適した環境が広がっていた可能性がある。

前述のように，津軽平野においては，弥生時代は遺跡の数が減少している。弥生時代以降は，十三湖の湖底の埋積が進み水深が小さくなったと考えられている（小岩ほか，2014：図 1-9）。水深が小さくなると，冬季の季節風や暖向期のヤマセ等がもたらす風波による湖水の攪乱が起こりやすく，成層化が生じにくい環境となり，遅くとも約 1000 cal BP には現在と同じような汽水環境が成立したと推定されている。

5. 亀ヶ岡遺跡周辺の縄文時代晩期の古地理

市原ほか（1984）は，亀ヶ岡遺跡周辺の古環境について「縄文晩期の亀ヶ岡の人たちは，飛砂のまだあまり激しくない屏風山の砂丘の間を通って七里長浜に通い，イルカの仲間やアシカなどの海棲動物を獲り，黒曜石や珪質頁岩の海浜礫を拾って持ち帰っていた」と推察している。亀ヶ岡遺跡が位置するのは，屏風山砂丘地帯中央部の東端であるが，ここでは MIS5e に形成された海成段丘面である山田野段丘が広く分布しているとともに，その西側には出来島段丘（MIS1）がみられ，砂丘は海岸部の横列砂丘が分布しているのみである。縄文時代晩期の海岸線の位置は明らかではないが，地形的には，亀ヶ岡遺跡の地点から海岸部までは，平坦面が連続しており，比較的，容易に海岸に到達できた可能性も指摘できるであろう。このように遺跡が立地している場所は，段丘面の分布が良好な地域，すなわち新砂丘に被覆されず，飛砂が比較的少なかった地域であると考えられる。

これまで述べてきた地形環境の変遷をふまえて，亀ヶ岡遺跡周辺の古地理を以下のように整理することができる。最終氷期の終了後，地球規模の気候変化の影響で生じた縄文海進により，津軽平野では五所川原や木造周辺まで海域が広がった。海進が終了し，海面高度が安定した後は，岩木川等の河川が運搬する土砂が埋積して平野が拡大し，水域は次第に縮小していく。岩木川の土砂が運搬される東側においてデルタが前進するとともに，亀ヶ岡遺跡前面には水深数 m の水域が縄文時代晩期まで残っていた。その水域は，海水の影響は及んでいるものの，現在の十三湖の湖水よりは塩分が低い湖水環境であったと推定される。当時の遺跡の西側には，飛砂の影響が少ない平坦な台地が存在し，容易に海岸部まで到達できる地形条件が存在しており，東側には河口的な環境が前面にみられるとともに，段丘面が刻まれた開析谷には湿地が広がっていたと考えられるであろう。

引用文献

青森県 2008「青森県遺跡地図」

吾妻　崇　1995「変動地形からみた津軽半島の地形発達史」『第四紀研究』34，pp.75-89.

市原壽文・井関弘太郎・加藤芳朗・大西青二・金子浩昌・那須孝悌・山内　文・日浦　勇・宮武頼夫・長谷川康雄　1984「縄文後・晩期における低湿性遺跡の特殊性に関する研究」文部省科学研究費特別研究「古文化財」総括班「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学-総括報告書-」: 657－672, 文部省.

海津正倫 1976 「津軽平野の沖積世における地形発達史」『地理学評論』49 pp.714-735.

海津正倫 2005「5-1 岩木川のつくる津軽平野」小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦編『日本の地形 3 東北』岩波書店，pp195-205.

遠藤邦彦　1996「津軽半島屏風山砂丘のパラボラ砂丘」『第四紀露頭集－日本のテフラ』日本第四紀学会.

遠藤邦彦・辻誠一郎　1977「青森県出来島海岸の第四系」『日本大学文理学部自然科学研究所　研究紀要』12, pp.1-10.

大塚由香里 2005「津軽平野における縄文時代以降の遺跡立地と地形環境」『弘大地理』39, pp.15-21.

小貫義男・三位秀夫・島田昱郎・竹内貞子・石田琢二・斉藤常正 1963「青森県津軽十三湖地域の沖積層」『東北大学地質古生物邦文報告』58，pp.1-36.

葛西未央・小岩直人 2014「岩木川下流低地のボーリングコア解析による完新世の環境変化」第四紀研究，53，pp. 213-228.

小池一之・町田　洋　2001　「日本の海成段丘アトラス」東京大学出版会.

小岩直人　2019「津軽平野における地形と遺跡」『考古学ジャーナル』723

小岩直人・葛西未央 2015 「津軽平野における縄文時代以降の地形環境」『考古学と自然科学』67, pp.29-38.

小岩直人・葛西未央・伊藤晶文 2014「青森県十三湖における完新世の湖水成層化と地形環境」『第四紀研究』 53，　pp.21-34

角田清美　1978　「津軽屏風山砂丘地帯の地形について」『東北地理』30，pp.15-23.

田村　亨　2017「五月女萢遺跡に係る砂丘砂の堆積年代について」『五所川原埋蔵文化財調査報告書第 34 集　五月女萢遺跡（第一分冊　本文編１）』pp.32-41.

辻　誠一郎・佐野忠史　2015　つがる市合併 10 周年記念冊子「つがる市の環境変遷と縄文遺跡」つがる市教育委員会発行.

町田　洋・新井房夫　2003　『新編火山灰アトラス』東京大学出版会，336p.

平井幸弘 1994 「日本における海跡湖の地形発達」『愛媛大学教育学部紀要Ⅲ自然科学』14, pp.1-71.

山口正秋・須貝俊彦・藤原　治・大森博雄・鎌滝孝信・杉山雄一　2005　「ボーリングコアの粒度組成と堆積速度からみた木曽川デルタの微地形と堆積過程」『第四紀研究』44，pp.37-44.

第5節　遺跡周辺の歴史的環境

1. 周辺遺跡の時代別変遷

つがる市内および周辺地域の歴史を概観し、時代別および縄文時代の時期別遺跡位置図を図 1-10～1-16 に示す。令和元（2019）年６月現在、つがる市内では 113 か所の遺跡が登録されている。年代的には前期中葉以後の縄文時代の遺跡と、平安時代の遺跡が大半を占めており、その多くは屏風山砂丘地帯と岩木山北麓の丘陵上に位置している。

旧石器時代　木造丸山に位置する丸山遺跡がある。年代は約 13,000 年前の後期旧石器時代最末期である。舟底形石核や、削器、掻器、および黒曜石の細石刃などが出土しており、県内でも数少ない細石刃文化期の遺跡である（青森県立郷土館 2000）。

また、屏風山砂丘地西縁部の「七里長浜」の海食崖に露出して、南北総延長１km あまりに及ぶ「出来島（できしま）埋没林」が展開している。この埋没林は、最終氷期約 25,000 年前の寒冷化した時代に生育したカラマツ属―トウヒ属の針葉樹林と考えられている。埋没林を包含する泥炭層（館岡層）の上位 10～15cm のところには、約 28,000 年前に鹿児島湾の形成に起因する噴火で噴出した火山灰（姶良テフラ）が薄く堆積している（辻 2001）。後期旧石器時代の植生・環境等を知る上で貴重な資料である。

縄文時代草創期～早期（図 1-10）　岩木山北麓の森田町大館八重菊に所在する八重菊（１）遺跡より、草創期の爪形文系土器と思われる破片が１点出土している（森田村教育委員会 2003）。

早期では、八重菊（１）遺跡や森田町床舞の鶴喰（つるばみ）（６）・（９）遺跡、木造越水の神山（３）遺跡から貝殻文系土器等が出土するが、同時期の遺構は未発見である。市内では岩木山北西麓と屏風山砂丘の南端部付近で早期の遺跡が確認され、隣接する鯵ヶ沢町北浮田地区でも同時期の遺跡が発見される。

縄文時代前期～中期（図 1-11・図 1-12）　前期中葉以前では、車力町花林の花林遺跡から刺突文土器、森田町床舞の石神遺跡から深郷田式とされる土器が出土している（江坂 1970）。しかし、早期に引き続き市内で当該期の遺跡は少ない。

前期中葉に始まる円筒土器文化以後になると、急激に人々の活動の痕跡が明確になる。円筒土器文化期の遺跡については、亀ヶ岡遺跡北側の谷を挟んで田小屋野貝塚が所在する。また市内には、219 点の出土品が国の重要文化財に指定され、円筒土器研究の基準となっている石神遺跡（江坂 1970、つがる市教育委員会 2015）や、牛潟町鷲野沢の牛潟（１）遺跡・（２）遺跡（車力村教育委員会 1990、1991、1994、1995、2004、2005、つがる市教育委員会 2009、2010）などがある。

縄文時代後期（図 1-13）　田小屋野貝塚の北側に位置する筒木坂屏風山（どうぎざかびょうぶざん）遺跡では、中期末葉～後期前葉の集落跡が確認された。竪穴建物跡のほか、フラスコ状土坑、埋設土器、配石遺構などが検出され、土器は後期初頭のものが主体である（つがる市教育委員会 2008b）。

森田町山田の山田遺跡、森田町床舞の石神遺跡・藤山（１）遺跡・鶴喰（６）遺跡、牛潟町鷲野沢の牛潟（１）遺跡、車力町屏風山の乗鞍遺跡、富萢町清水の清水遺跡なども、出土土器から十腰内式期に属する遺跡と判断される。鶴喰（６）遺跡では、円形に組まれた配石遺構を囲むかたちで複数の性格不明の土坑が検出されている（森田村教育委員会 2003）。土坑は円筒形ないしはフラスコ状で、十腰内Ⅰ式土器が出土している。底面中央にはピットが掘り込まれ、石器の埋設も確認された。

つがる市近隣では、岩木山北麓の丘陵上に位置する弘前市の十腰内（２）遺跡が、十腰内式土器の標式遺跡として著名である（岩木山刊行会 1968）。これまでの調査により、竪穴建物跡・屋外炉・配石遺構などの遺構が検出されている。遺物は土器・石器・石製品などが多数出土している。

その他に、縄文後期・晩期・平安後期の複合遺跡である五所川原市の観音林遺跡からは、後期前葉～中葉の土器や土製品が出土している（五所川原市教育委員会 1975、1984～1992）。同市（旧・金木町）の妻の神（１）遺跡では、竪穴建物跡と土坑群から十腰内Ⅰ式の土器や石器が出土している（青森県教育委員会 1976、金木町教育委員会 1977）。妻の神（１）遺跡に隣接する同市の神明町遺跡では、

検出された竪穴建物跡２軒から十腰内Ⅲ式の土器や石器が出土している（青森県教育委員会 1980）。鰺ヶ沢町の大曲遺跡では、Ⅰ号地点において竪穴建物跡・土坑・配石遺構が各１基検出され、十腰内Ⅰ式土器が出土している（岩木山刊行会 1968）。

縄文時代晩期（図 1-14）　亀ヶ岡遺跡のみならず周辺地域においても多く確認されている。かつて「床舞遺跡」の名称であった森田町床舞の石神遺跡・藤山（１）遺跡は、前述の通り円筒土器文化期の遺跡として著名であるが、既に明治時代には晩期の土器や土偶が豊富に出土することで知られていた（佐藤 1898）。各機関による発掘調査も行われており、弘前大学の調査では晩期前半の、早稲田大学の調査では晩期後半の土器が出土している（西村ほか 1952、江坂 1970）。牛潟町鷲野沢の牛潟（１）遺跡・（２）遺跡でも、市教委の調査で晩期の竪穴建物跡や土坑、および東斜面上に構築された盛土を検出している（つがる市教育委員会 2009、2010）。

周辺市町村を見てみると、五所川原市（旧・市浦村）では五月女萢（そとめやち）遺跡の調査が行われている（市浦村教育委員会 1983、五所川原市教育委員会 2006、2017）。亀ヶ岡遺跡から北へ約 20km 地点、十三湖北西岸の砂丘上に遺跡が形成される。竪穴建物跡は未確認であるが、マウンドを有する大規模な環状土坑墓群や、特異な遺物を伴う集石遺構が検出された。遺物集中地点からは多量の土器や石器が出土したほか、人面形浅鉢の出土や埋葬人骨の検出も特筆される。土器は大洞 B1～A’式まで出土しているが、特に大洞 C2～A 式が多数みられる。また、動物遺存体ではヤマトシジミからなる貝層ブロック、およびイノシシやシカなどのほ乳類、鳥類、魚類が確認された。

亀ヶ岡遺跡から東へ約 12km 地点、金木川と小田川に挟まれた台地の端部に位置する同市（旧・金木町）の千苅（１）遺跡では、県の調査により竪穴建物跡３軒と土坑墓１基が検出された（青森県埋蔵文化財センター1995a）。ここでは通常規模の建物跡と大型建物跡がセットで確認され、うち１軒は直径約 12m の大型建物であった。出土した土器は大洞 C2～A 式が主体となるが、大洞 C1 式期の土製仮面も１点出土している。石器は合計で 4000 点以上出土している。

亀ヶ岡遺跡から南東へ約 17km 地点、松野木川右岸の河岸段丘上に位置する同市の観音林遺跡は、縄文後期・晩期・平安後期の複合遺跡であるが、とりわけ晩期には拠点的集落だったと考えられている（五所川原市教育委員会 1975、1984～1992）。捨て場とみられる遺物包含層から、晩期中葉～後葉が主体の土器・土偶が大量に出土している。

亀ヶ岡遺跡から南へ約 17km 地点、弘前市の十腰内（１）遺跡は岩木山北麓の丘陵斜面に位置し、すぐ南には縄文後期の標式遺跡となった十腰内（２）遺跡がある。明治時代から亀ヶ岡式土器が出土することが知られていたが、県の調査によって集落跡の様相が明らかとなった（青森県埋蔵文化財センター1999b、2001）。遺構は竪穴建物跡５軒をはじめ、埋設土器や集石遺構、道路状遺構などが検出された。竪穴建物跡のうち１軒は、直径約 13m の大型建物である。土器は大洞 BC～C1 式が主体であり、石器や祭祀に関する遺物も多く出土している。

亀ヶ岡遺跡から南へ約 20km 地点、岩木山北東麓の舌状台地上に位置する弘前市の大森勝山遺跡では、昭和 34～36（1959～61）年に開発に伴う発掘調査が行われ、大型竪穴建物跡や環状列石が確認された（岩木山刊行会 1968）。直径 13.5m の大型竪穴建物跡では床面に柱穴と石囲炉が検出され、晩期初頭の遺物が出土した。環状列石はマウンドの斜面に 70 基以上の組石を配置したもので、周囲に捨て場や石囲炉、埋設土器が確認され、祭祀の場としての利用が考えられている。円盤状石製品など、祭祀に関する遺物も大量に出土している。

亀ヶ岡遺跡から南東へ約 23km 地点、岩木川右岸の板柳町中心部に位置する土井（１）遺跡では、平野部の自然堤防上に遺跡が形成されている。近世の蔵屋敷造成に伴う盛土層の下から縄文時代の遺物包含層が確認され、地表下約２m から後期末および晩期の遺物が大量に出土した（板柳町教育委員会 1993）。土器は完形品が多く、主体をなすのは大洞 BC～C1 式である。土製品では土偶やミニチュ

ア土器などのほか、石製品では玉類が 100 点以上出土した。また、低湿地に位置するため漆塗り製品が良好に保存されており、籃胎漆器や赤漆塗り櫛などが出土している。

弥生時代（図 1-15）　亀ヶ岡遺跡の周辺では、城西遺跡・館岡屏風山（２）遺跡・鳥谷沢遺跡などから弥生時代（続縄文）の土器が採集されている。

また、日本海に面する木造越水の神田（かみた）遺跡より、弥生時代後期に並行する続縄文文化の後北 C1 式土器が出土している（小山内・岡田 1983）。県内で後北 C1 式が出土する例は珍しく、この時代における当地と北海道との交流が窺える。さらに、市域南部では神田遺跡東方の越水屏風山遺跡・神山（２）遺跡、および岩木山北麓の森田町大館の八重菊（１）遺跡などから、市域北部では牛潟（１）遺跡・（２）遺跡・清水遺跡から、弥生土器や続縄文土器が出土している。

周辺市町村の例では、岩木山麓の丘陵地先端に位置する弘前市の砂沢溜池の南岸に、砂沢遺跡がある。本州最北端かつ東日本最古となる弥生前期の水田跡が発見され、出土遺物は北東北における弥生時代前期「砂沢式」の標式資料となっている（弘前市教育委員会 1988、1991）。また、砂沢溜池の北に位置する廻堰大溜池（津軽富士見湖）の近くに所在する同市の清水森西遺跡では、弥生時代前期後葉の五所式土器が見つかっており、近年の調査では炭化米も出土した（上條 2019）。

岩木山北麓を流れる鳴沢川河岸の台地上に位置し、森田地区に接する鰺ヶ沢町の大曲遺跡は、縄文時代中期から平安時代にかけての複合遺跡であるが、遺跡の西側から過去に多数の砂沢式土器が採集されている。青森県立郷土館による発掘調査でも、遺構は検出されなかったが砂沢式土器が出土している（木村 1989）。土器は変形工字文が施された精製の壺や浅鉢のほか、熊と推定される獣頭突起を有する壺、条痕文の施された鉢、遠賀川系の大型壺なども確認されている。

旧金木町の中心部北方の台地上に位置する五所川原市の神明町遺跡では、縄文時代後期および平安時代の竪穴建物跡ともに、弥生時代前期の土坑墓が１基検出された（青森県教育委員会 1980）。土坑墓は隅丸長方形で、長軸はほぼ東西方向である。遺構内からは高坏・鉢・壺のほか石製垂飾品が出土しており、二枚橋式期のものと推定されている。

古墳時代　近年の発掘調査により、森田町大館の八重菊（１）遺跡からこの時代に相当する続縄文文化の後北 C2・D 式土器が出土したが、近隣では、五所川原市南東部の前田野目川沿いの丘陵地上に位置する隠川（11）遺跡、隈無（１）遺跡、桜ヶ峰（２）遺跡において後北 C2・D 式土器が出土している。なお、隠川（11）遺跡では古墳時代前期の赤彩が施された高坏や壺などの古式土師器が共伴して出土した（青森県埋蔵文化財センター1999a）。

奈良時代　市内では現在のところ、この時期の遺跡は未発見である。津軽地域全体でも奈良時代の遺跡は南部に集中しており、北部では五所川原市（旧・市浦村）の中島遺跡のみである。十三湖に浮かぶ中ノ島で坏・高坏・甕などが出土しており、８世紀前半の土師器と考えられている（桜井 1954）。

平安時代（図 1-16）　最も古い遺跡は、つがる市最北部、十三湖西南岸に位置する富萢町清水の清水遺跡で、９世紀代の集落跡が発見されている（青森県教育委員会 2002）。多くの遺跡が発見されるのは、10 世紀前半とされる白頭山苫小牧火山灰降灰以前の９世紀末～10 世紀前葉頃で、特に台地上に濃密に分布する。岩木山北麓の森田地区には鉄生産に関連する遺跡が多く、森田町大館の八重菊（１）遺跡、森田町床舞の豊原（１）遺跡では、砂鉄を始発原料とする製錬炉跡が発見されている（森田村教育委員会 2001～2004）。屏風山砂丘地帯には、集落に伴う壕が発見された豊富町の豊富遺跡や、集落に伴う柵列跡や畠跡が確認された牛潟町の牛潟（２）遺跡等がある。

10 世紀中葉以降、特に 10 世紀後半になると、津軽平野の微高地をなす自然堤防上にも遺跡が出現する。斎串や墨書土器などが出土し、大和朝廷勢力との接触・交流が推定される木造蓮川の石上神社遺跡のほか（青森県教育委員会 1977）、森田町上相野の上相野遺跡、稲垣町の久米川遺跡・松枝遺跡・懸河遺跡などがある。炭化米等が発見されていることから、低地における水田稲作と関連付ける見解

もある。また近年、柏地区でも桑野木田八幡遺跡が新しく見つかり、この段階には津軽平野の自然堤防上の広域に遺跡が形成されていた様相が明らかとなった。

中世（鎌倉～室町時代）　つがる市域は、室町時代末期頃になって鼻和郡の一部となった。この時期の遺跡には、五所川原市（旧・市浦村）に所在する中世の港湾都市、国史跡十三湊遺跡に直接かかわる宗教施設と考えられる、富萢町屏風山の明神沼遺跡（浜の明神遺跡）がある。

このほかには、森田町大館の狄ヶ館遺跡、森田町床舞の床舞館、森田町中田の漆館、車力町若林の柾子館などが中世の館跡とされ、狄ヶ館遺跡は、古代の「防御性集落」とする見解もある。

なお、江戸時代初期に弘前の西茂森に移転して「長勝寺構」の一部となり、現在は国史跡津軽氏城跡の一部を構成する寺院「勝岳院」が、森田町床舞の石神遺跡内に所在したとされているが、遺構が発見されず正確なことは不明である。

近世（江戸時代）　つがる市域は、慶長２（1597）年に津軽氏の領地田舎郡の一部となって以後、江戸時代を通じて津軽為信を藩祖とする津軽氏の所領であった。津軽領となってからは新田開発が進み、現在市内にある集落の多くはこの過程で成立している。

木造館岡城西にある亀ヶ岡城跡は、２代藩主津軽信枚の時代の元和８（1622）年に木造新田開発の拠点として造られたが、幕府の一国一城令によって翌年築城が中止された。幕府の命令に地方大名が従ったことを示す貴重な遺跡であると同時に、亀ヶ岡遺跡発見の端緒とされてきた歴史的意味を持つ。

また、砂防林として日本海に並行して植林された屏風山の松林、旧街道沿いや木造曙に所在した津軽藩木造代官所跡地周辺に所在する松並木、かんがい用溜池とそれに付随する堰（水路）跡なども、新田開発に伴う遺構・遺跡である。なお、江戸時代後半に頻発した「ケガチ」と呼ばれた飢饉では、つがる市内でも相当な被害があったことを菅江真澄の旅行記などで知ることができる。

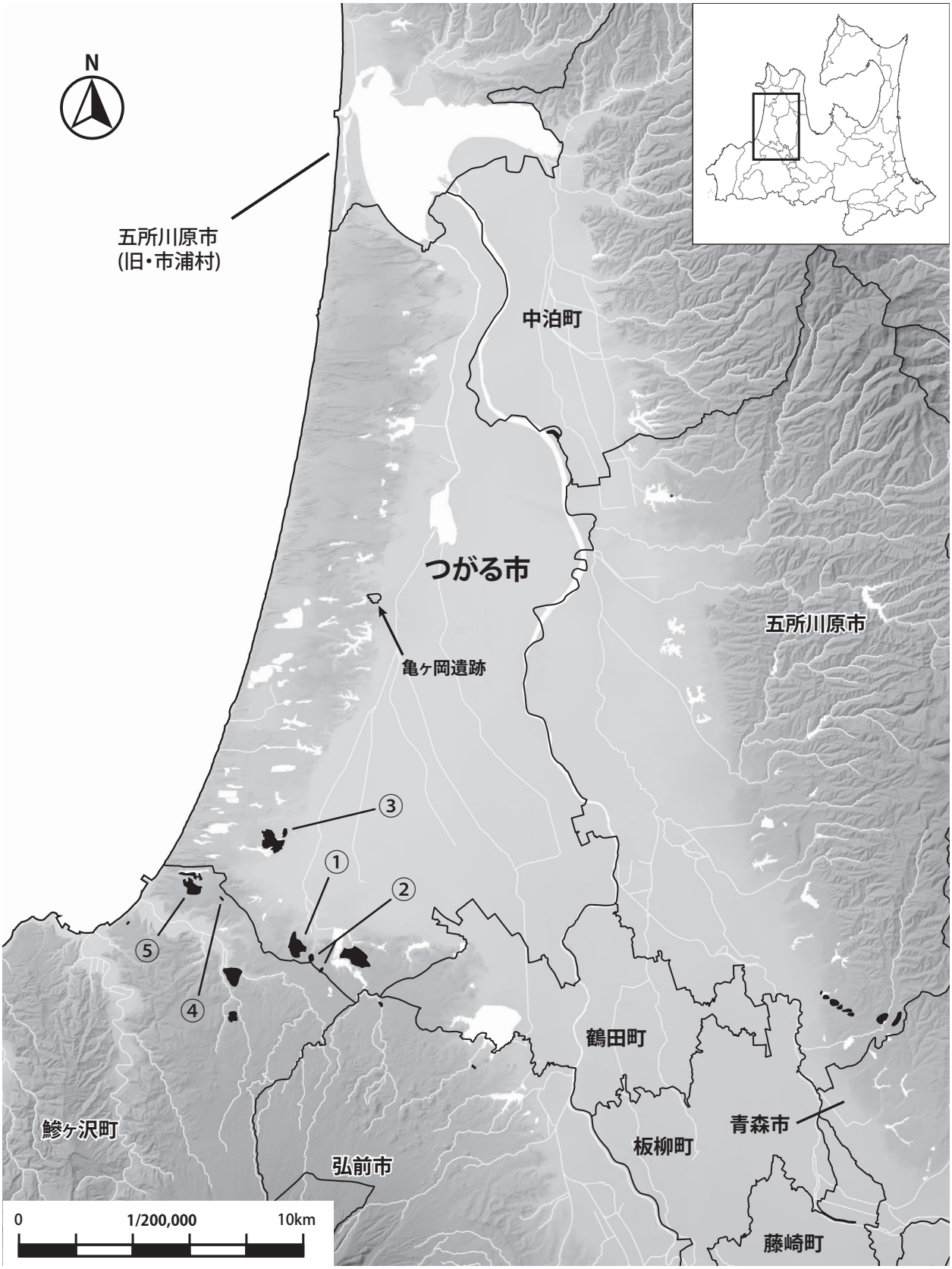
2. 館岡地区の歴史

亀ヶ岡遺跡・田小屋野貝塚が所在する地区は、館岡地区と呼ばれている。この地区は、鎌倉時代には江流末郡に属し、室町時代末期頃になって鼻和郡の一部となった。また慶長２（1597）年に、つがる市域が津軽氏の領地となって以後、館岡地区は田舎郡の一部となった。その後、弘前藩４代藩主信政の時代、寛文４（1664）年に田舎郡は田舎庄に改められ、その中の広須遣に属した。広須遣はのちに広須組となり、天和元（1681）年には広須新田と名称を変更した。また広須新田は、宝暦４（1754）年に広須組と木造新田に分割されたため、それ以後館岡地区は、木造新田に属することとなった。

館岡地区は、土器等が出土することから江戸時代初期には「瓶ヶ岡」または「亀ヶ岡」と呼ばれていたようで、２代藩主信枚の時代、元和８（1622）年に亀ヶ岡城築城工事が行われて以後、「館岡」と呼ばれるようになったようである（佐藤 1954）。

亀ヶ岡城は森内左兵衛と大湯彦右衛門が普請奉行として築城にあたったが、幕府の一国一城令を受け、築城が中止された。しかし、築城中止以後もこの地区の新田開発は続き、寛文年間（1661～72年）以後は主に野呂理左衛門家が開拓を行ったとされる。また津軽４代藩主信政の治世の元禄９（1696）年には、開拓を奨励するため亀ヶ岡城築城の地に「御仮屋」を設け、藩主信政も来訪した（佐藤前掲）。その後、明治３（1870）年５月に弘前藩庁、翌年７月には弘前県の所轄となり、同年９月からは青森県の所轄の第４大区第８小区となった。明治 22（1889）年に市町村制が実施されると館岡村となり、館岡・亀ヶ岡・大湯町・菰槌・筒木坂・平滝の６大字の編成となった。昭和９（1934）年の史跡申請および昭和 19（1944）年の史跡指定当時の亀ヶ岡遺跡・田小屋野貝塚は館岡村の所属であり、昭和19 年 10 月 24 日付けで史跡の管理団体となったのも館岡村である。

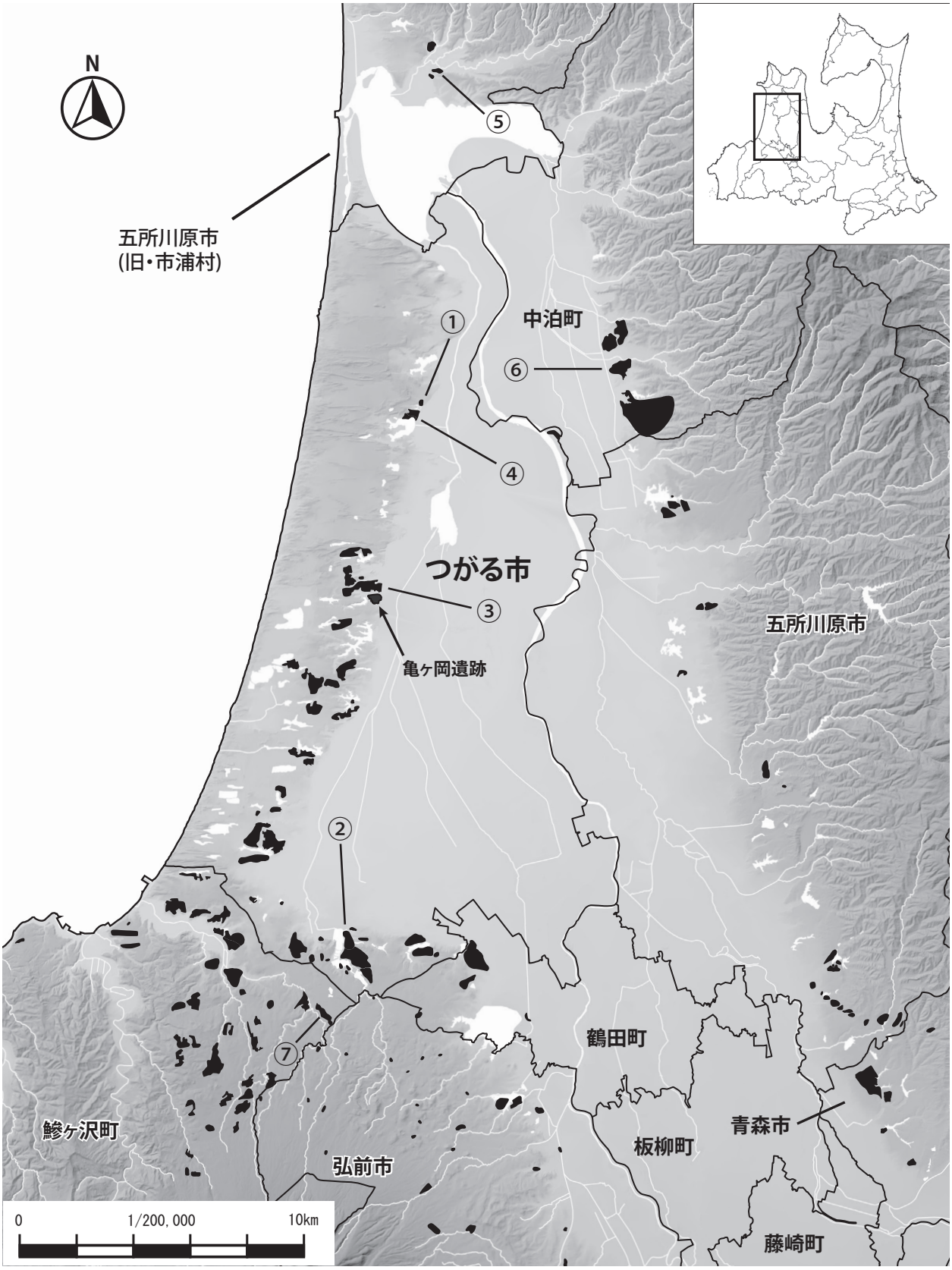
その後昭和の大合併によって、昭和 30（1955）年３月 30 日に館岡村は木造町となり、平成 17（2005）年２月 11 日、平成の大合併によって、つがる市となった。



① 八重菊(1)遺跡（草創期・早期）　② 鶴喰(6)遺跡・(9)遺跡（早期）　③ 神山(3)遺跡（早期）
④ 平野(2)遺跡（早期）　⑤ 今須(3)遺跡（早期）

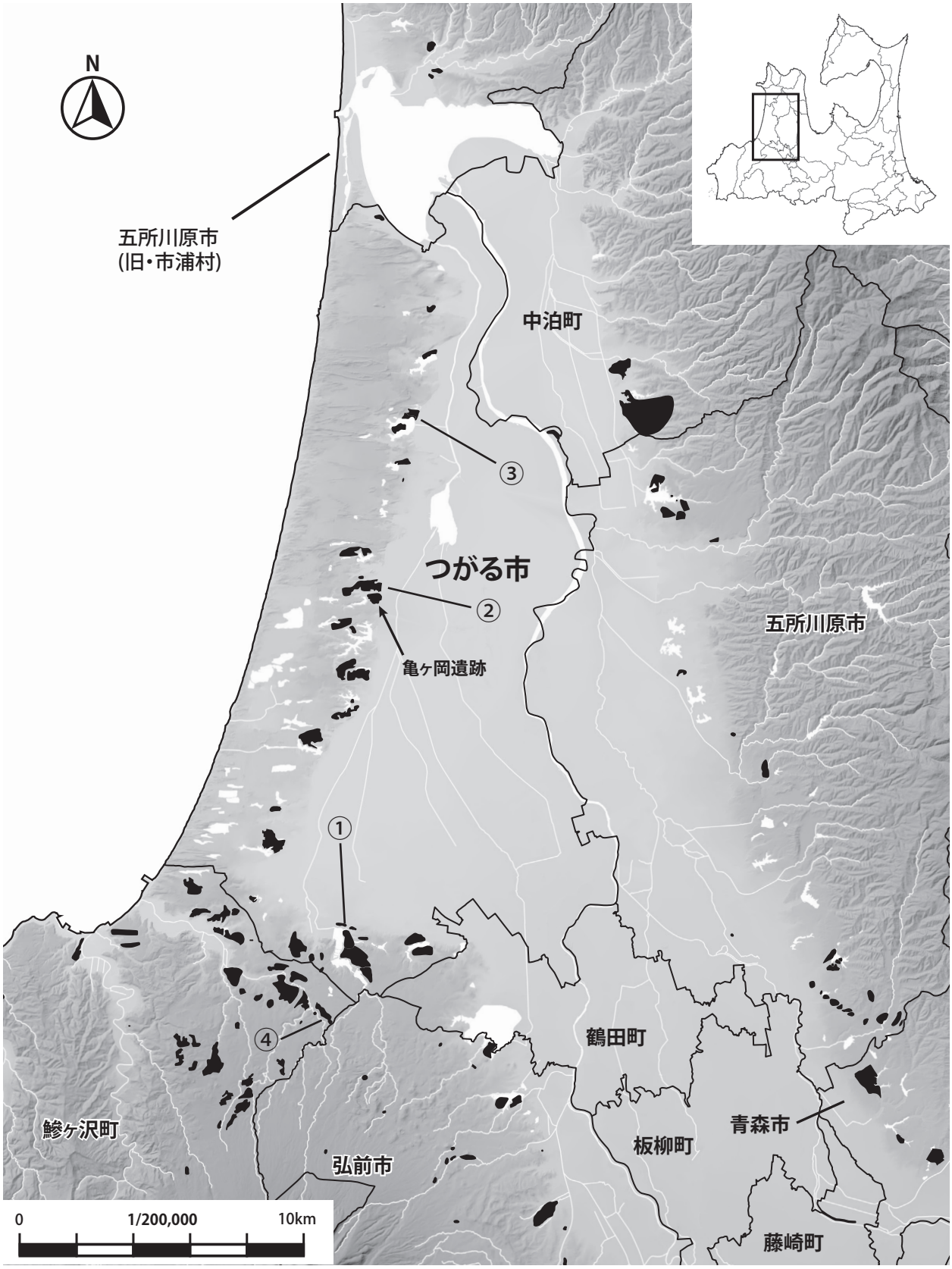
図1-10～1-16は、国土地理院10mメッシュDEMおよび国土交通省国土政策局の国土数値情報を用い、QGISを援用して作成。遺跡分布は青森県教育委員会（2009）による。

図1-10　周辺遺跡位置図（縄文時代草創期・早期）



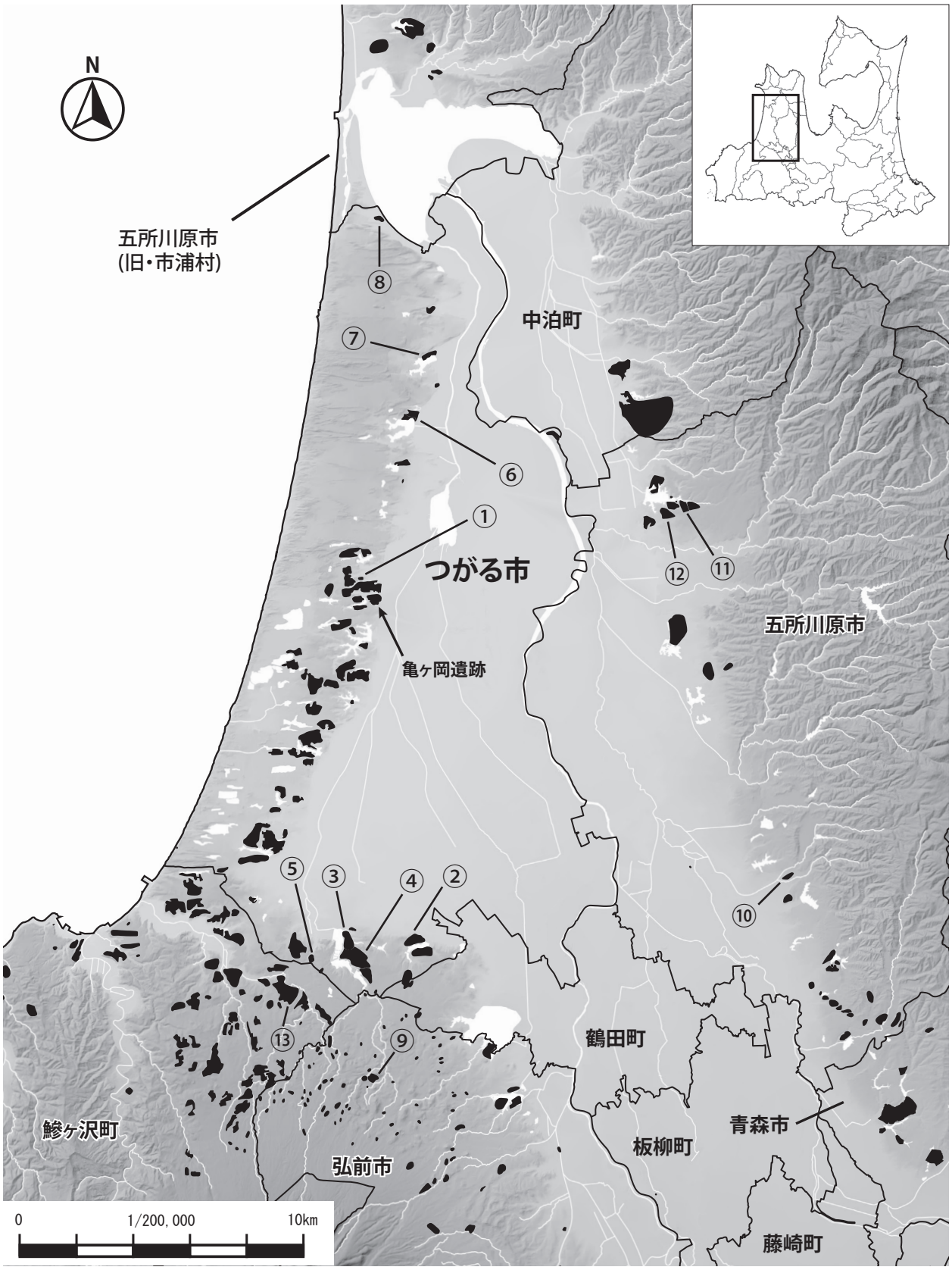
① 花林遺跡　② 石神遺跡　③ 田小屋野貝塚　④ 牛潟(1)遺跡・(2)遺跡
⑤ オセドウ遺跡　⑥ 深郷田遺跡　⑦ 餅ノ沢遺跡

図1-11　周辺遺跡位置図(縄文時代前期)



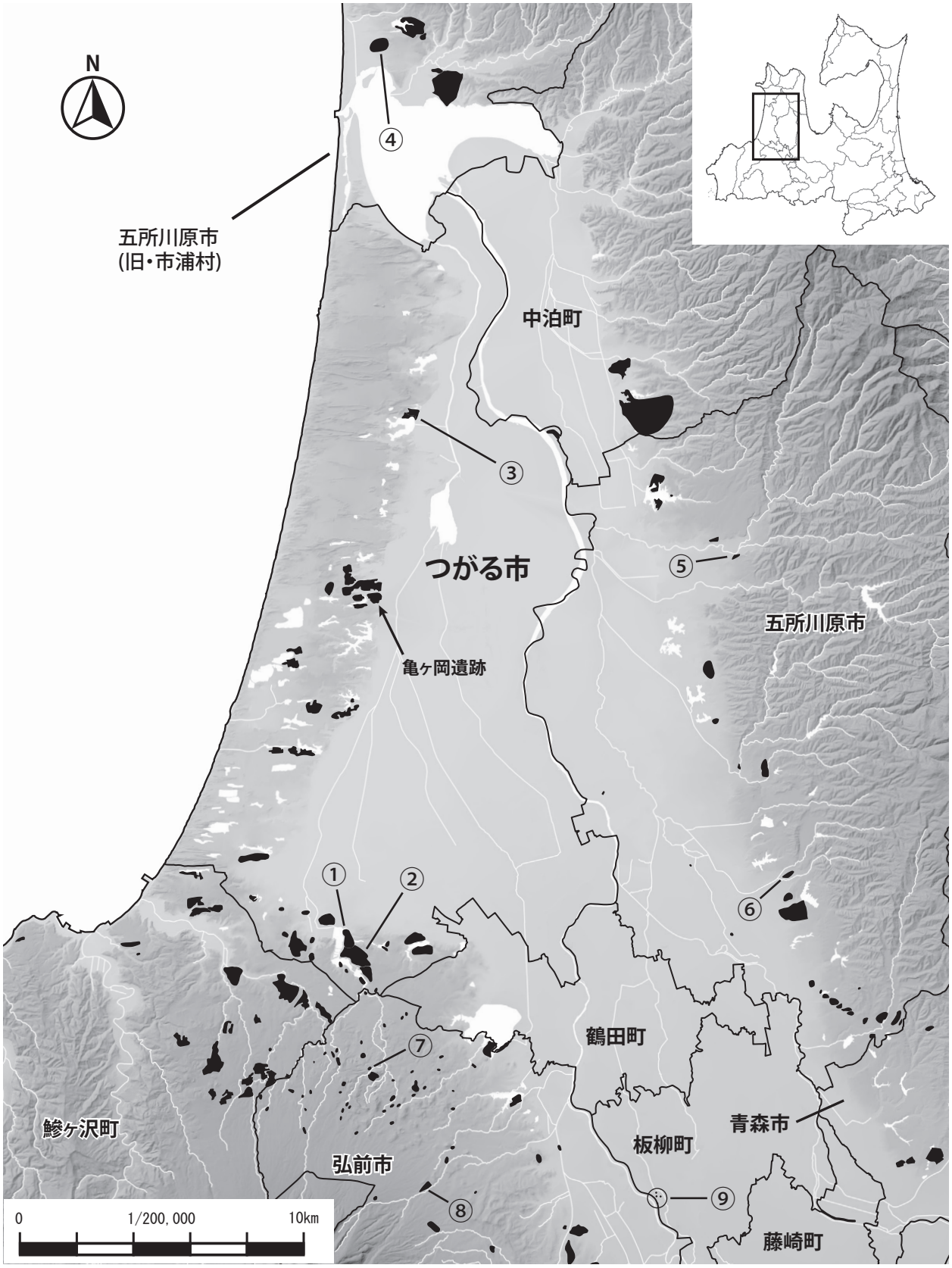
① 石神遺跡　② 田小屋野貝塚　③ 牛潟(1)遺跡・(2)遺跡　④ 餅ノ沢遺跡

図1-12　周辺遺跡位置図(縄文時代中期)



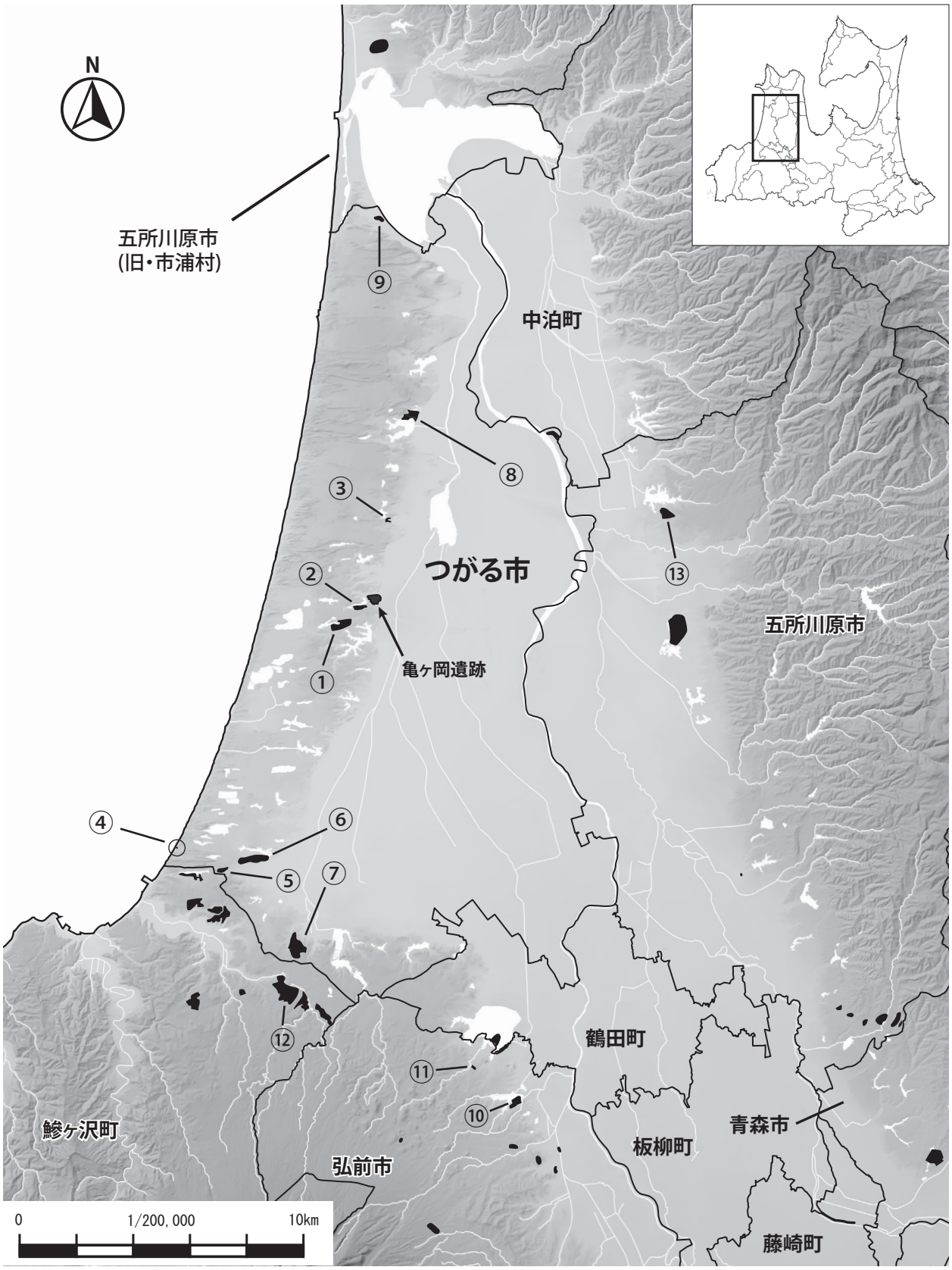
① 筒木坂屏風山遺跡　② 山田遺跡　③ 石神遺跡　④ 藤山(1)遺跡
⑤ 鶴喰(6)遺跡　⑥ 牛潟(1)遺跡　⑦ 乗鞍遺跡　⑧ 清水遺跡
⑨ 十腰内(2)遺跡　⑩ 観音林遺跡　⑪ 妻の神(1)遺跡　⑫ 神明町遺跡
⑬ 大曲遺跡

図1-13　周辺遺跡位置図(縄文時代後期)



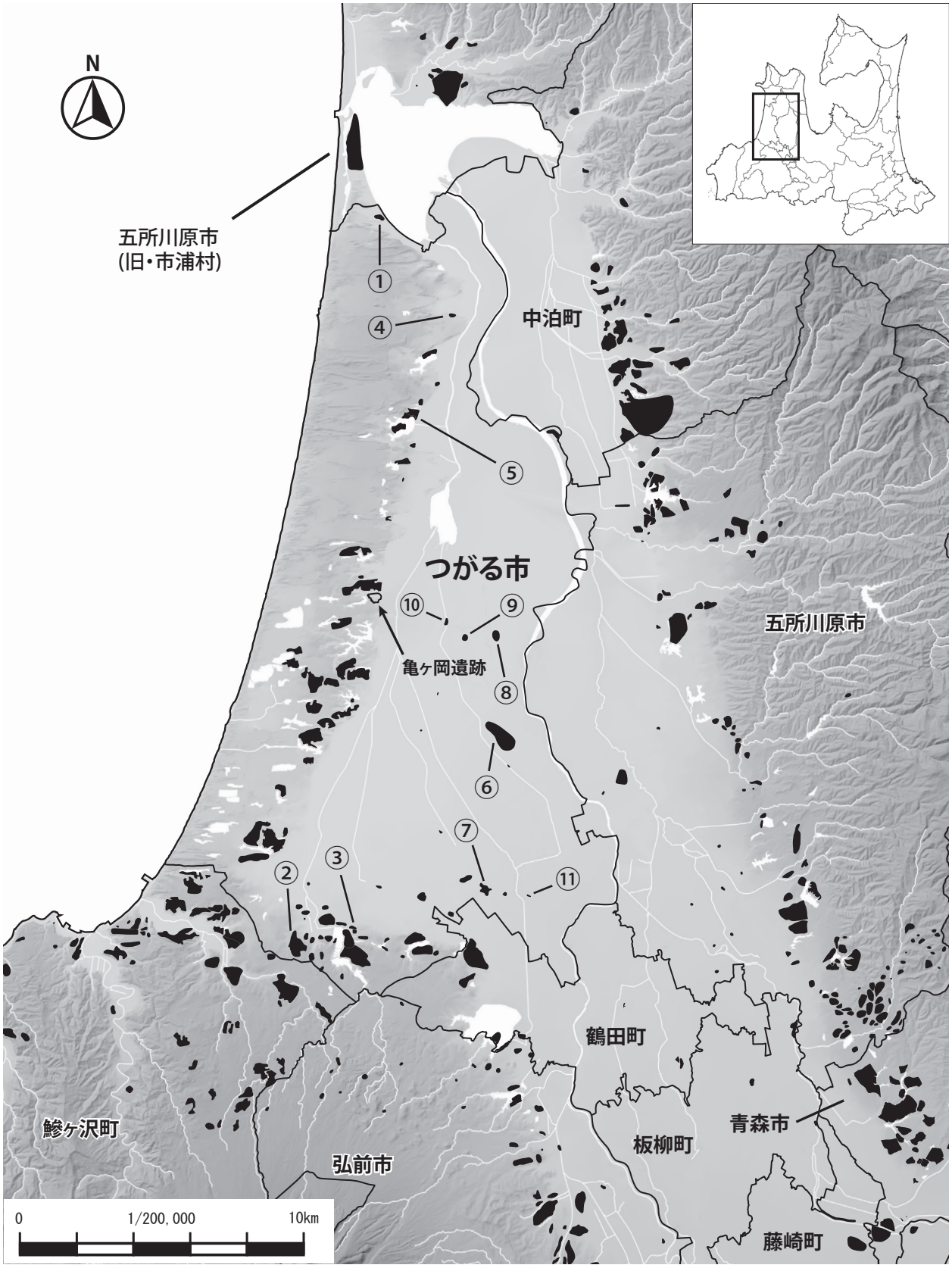
① 石神遺跡　② 藤山(1)遺跡　③ 牛潟(1)遺跡・(2)遺跡
④ 五月女萢遺跡　⑤ 千苅(1)遺跡　⑥ 観音林遺跡
⑦ 十腰内(1)遺跡　⑧ 大森勝山遺跡　⑨ 土井(1)遺跡

図1-14　周辺遺跡位置図(縄文時代晩期)



① 城西遺跡　② 館岡屏風山(2)遺跡　③ 鳥谷沢遺跡　④ 神田遺跡
⑤ 越水屏風山遺跡　⑥ 神山(2)遺跡　⑦ 八重菊(1)遺跡　⑧ 牛潟(1)遺跡・(2)遺跡
⑨ 清水遺跡　⑩ 砂沢遺跡　⑪ 清水森西遺跡　⑫ 大曲遺跡
⑬ 神明町遺跡

図1-15　周辺遺跡位置図(弥生・続縄文時代)



① 清水遺跡　② 八重菊(1)遺跡　③ 豊原(1)遺跡　④ 豊富遺跡
⑤ 牛潟(2)遺跡　⑥ 石上神社遺跡　⑦ 上相野遺跡　⑧ 久米川遺跡
⑨ 松枝遺跡　⑩ 懸河遺跡　⑪ 桑野木田八幡遺跡

図1-16　周辺遺跡位置図(平安時代)